

「仙人募集中」

【登場人物】

五色

ナカゴミ

フルサワ

コクブン

赤英／母親

青虎

白仁季

黒月天

無心

りんず

※モブキヤラは、赤英、青虎、白仁季役の人が行う

父親、同級生、先輩

店長、強盗

部長、お局、取引先の課長

医者

「仙人募集中」

【0幕 仙人募集中】

舞台には上手に超仙人の黒月天、仮面を付けた3大仙人の赤英、青虎、白仁季の4人、下手に中堅仙人の山戸五色がいる。

30秒くらいの【キミも仙人になろう！】自衛隊系の熱い内容のCM（映像）が流れる。映像が難しい場合、黒月天、赤英、青虎、白仁季の4人で演じる。

映像終わりに

明転。

赤英「どう？」

五色「え？」

赤英「いやだからさ、今の映像どうだったかな？」

五色「えっと…仙人を新しく募集するCMでしょうか…？赤英様」

青虎「その通りだ。五色は今のCMを観て仙人になりたくなくなったか？」

五色「青虎様…私はもうすでに仙人なので、そういう気持ちはちよっともう分からないです」

白仁季「駄目だなあ。お前は仙人の中でも若いのだからそういうのに敏感でないと」

五色「申し訳ございません…」

白仁季「まったく…どう思われますか？黒月天様」

黒月天「山戸五色よ…許す」

白仁季「許そう」

五色「…ありがとうございます」

青虎「まあCMの件をさておき。先ほど五色が言った通り、現在我々は新しい仙人を募集している。今日はその集まりだ」

黒月天「あ、今日そういう集まりだったんだ？」

五色「はい」

赤英「最近、地上で仙人になろうっていう人間が減ってきていてね」

黒月天「分かるー減ってる減ってる。ワシも超思ってた」

白仁季「理由はそれだけではない。地上では科学が発達し過ぎたため、それに目を付けた宇宙人がこの地球を侵略しようとしている」

黒月天「エイリアンね。映画で観たよこの前。ぶえわあー！って（エイリアンの真似をする）」

白仁季「そのような奴等からこの星を守るためにも仙人を増やさねばならないという訳だ」

→の台詞に、黒月天エイリアンの真似などで台詞をかぶせてくる。

白仁季「黒月天様、少し黙っていてもらえますか？」

黒月天、変な顔をする。

赤英「まあそれに、そろそろキミ自身も弟子を取った方が良いと思ってね」

五色「そんな、私にはまだ早いです」

赤英「そんなことはないよ。キミはすでに優秀な仙人だ。72ある仙道も極めつつある。

これは我々3大仙人でも未だ成し得ていないことだよ」

白仁季「何も仙道を極めることだけが仙人の力ではないがな」

青虎「とは言え五色が優秀なのは確かだぞ白仁季。我々に加わり、4大仙人と呼ばれる

将来もそう遠くないと私は考える」

黒月天「うんうん。ワシも好きだよ五色君のこと」

五色「恐縮です。しかし、今私の元にはりんずがいますし」

白仁季「りんずは別にお前の弟子ではない。私の従者だ。今は修行の一環でお前の元で学

ばせているだけのこと」

五色「…申し訳ございません」

青虎「とにかく、だ。色々な都合で五色、お前に新弟子の件を任せたいのだよ」

黒月天「まあまあまあでもね、大変な仕事でもあるから。その褒美という訳ではないが、

もし引き受けてくれるとなれば、ワシの宝玉を1つ授けよう」

白仁季「な…黒月天様が大切にされている、2つあるあの玉のことですか？」

黒月天「うむ、あの2つある宝玉ちゃんのことじゃ」

赤英「ほう…黒月天様の、玉を」

五色「え？（黒月天の股間を見て）それってあの玉のことではないですよね？」

黒月天「さてさて五色よ」

五色「せめて否定してください」

黒月天「弟子の件、やってくれるな？」

4人、真剣な顔で五色をじっと見ている。

五色「…承知しました。ご期待に添いましょう」

間

赤・青・白「よかったー」

赤英「ほっとしたーほっとしたよ」

青虎「黒月天様の玉が利きましたかね？」

白仁季「このあとはどうする？」

黒月天「4人いるし、バトルドームでもしようぜ」

喋りながら、黒月天と3大仙人達がはけていく。

五色「……はあ……まずはチラシでも作りますか。りんず」

りんず（声）「はっ」

BGMが流れる。舞台に紙を数枚持ったりんずが出てくる。五色とりんずがジェスチャーでチラシのデザインを考える。2枚くらいボツ案が出た後、完成品ができる。そのチラシが実際のポスターのデザイン。そのまま揚々とはける、五色とりんず。

上手にコクブンと父親が現れる。コクブン（4歳）、興奮して父親に話しかけている。

コクブン「お父さんお父さん！あのね！」

父親「春子！どこに行ってたんだ！お父さん心配したんだぞ！」

コクブン「ごめんなさい……」

父親「ここまで誰かに連れてきてもらったのか？」

コクブン「うん！」

父親「そうか。親切な人もいるものだ。どういう人だったんだ？」

コクブン「あのね、仙人」

父親「は？」

コクブン「仙人が導いてくれたんだよ。すごいかつこよかったなあ……」

父親が真ん中からはけて、同級生が現れる。

同級生「もう小学校も卒業かあ」

コクブン「うん！」

同級生「でもすごいよね春子ちゃんは！大人になったらなりたいお仕事が決まってるんでしょ？」

コクブン「うん！」

同級生「だったら卒業の記念に、春子ちゃんになりたいお仕事教えてよ！」

コクブン「仙人」

同級生「は？」

コクブン「仙人」

同級生が後ろの箱からスーツと眼鏡を出し真ん中からはけて、先輩が現れる。

先輩 「お前ももう三角高校を卒業か」

コクブン 「はい！先輩！」

先輩 「俺は去年一足先に東京に行ったけど…お前に会えない日々は辛かった」

コクブン 「え？それって、先輩…」

先輩 「春子！俺と付き合ってくれ！そして…東京で一緒に暮らさないか、」

コクブン 「あ、それは無理です」

先輩 「うん？」

コクブン 「東京だとなれないので、仙人」

先輩 「は？」

コクブン 「やっぱり山奥じゃないと、仙人」

下手にサラリーマンのフルサワと取引先の課長が現れる。フルサワはハンカチ（黄色）を持っており定期的に汗を拭く。↓これはその後の2、4、5幕でも。

フルサワ 「いつもお世話になっております。山田課長」

課長 「はいはいはい。それでフルサワちゃん、例の仕事は順調なのかい？」

フルサワ 「それがですね…やはり2日ほど遅れてしまいそうでして…（台詞中、課長はうんうん頷いている）」

課長 「うん、どーん！（叩く）駄目でしょう？それは。キミの会社との取引やめちゃうよ…？」

フルサワ 「申し訳ございません…」

課長、はける。フルサワの上司の部長が現れる。

部長 「三角商事との取引はどうなったかね？フルサワ」

フルサワ 「あ、稲岡部長…それがですね、中々うまくいかず…（台詞中、部長はうんうん頷いている）」

部長 「うんどーん！（蹴る）キミのそういうところが駄目なんだよ…馬鹿！」

部長、はける。お局がお茶を持って現れる。

お局 「あらあら。だいぶ言われちゃってたわね。大丈夫？フルサワ君」

フルサワ 「事務の斎藤さん。すみません。しかしこれくらい全然平気です、」

お局「はいどーん！（持っていたお茶を顔にかける）あんたはねえ…もう、全体的に駄目なのよ」

お局、はける。

フルサワ「…今日も今日とて通常運行、ですわねえ。でも最後のお局はちよつとやり過ぎじゃないかな…」

真ん中にニートと母親が出てくる。母親は正座している。

母親「忠司ちゃん」

ナカゴミ「なんだよババア。相変わらず男か女か分からない顔しやがって。飯以外で入ってくるなって言っただろうが」

母親「ごめんね忠司ちゃん。でもね、伝えないといけないことがあってね」

ナカゴミ「早く言えよ。もうすぐパズドラのダンジョンボーナスの時間なんだよ！」

母親「その前に忠司ちゃん。今日は何の日分かる？」

ナカゴミ「ああ？もしかして、ババアの誕生日かあ？だったらプレゼントに…俺のゲロをくれてやろう！（ゲロを母親にかける）はっはっは！」

上手に照明。

コクブン「さて！高校を卒業して一か月！今日も今日とて、仙人になるための修行頑張るぞー！…とか言ってる間にもう10年が経ったな！もう親とも連絡が取れない！私は、本当に仙人に近づいているのかな？」

下手に照明。フルサワの両脇で取課長と部長がガミガミ言っているマイム。フルサワ、←の台詞を言いながら両脇の2人に謝ったりゴマをする動作。

フルサワ「ずっとこの仕事を続けていますが…上達するのはこういうことばかり…サラリーマン、私には合わないのでしょうか…」

真ん中に照明。母親、懐からクラッカーを取り出し、鳴らす。

ナカゴミ「びっくりした！何だよ急に！」

母親「おめでとう。今日でちょうど1000日目の記念日なの。あなたがニートになってね。…全然おめでたくないわよおお!!」

ナカゴミ「えええ…」

りんずが上手から出てきて、チラシを舞台上にまき散らし、そのまま下手からはける。コクブン、チラシを手取る。

コクブン「何々…仙人になりたい人…募集中！…な、ななななんだってえ！」

フルサワ「(チラシを手取って) ふむふむ…仙人、か…。窮屈ではなさそうな職場、悪くないですねえ。私が今まで培ってきた営業スキルも、活かせそうです」

ナカゴミ「だ、だから何だよ！働けっつか！」

母親「ふふふ…あなたの行く末を心配していた矢先にこの話。これはもう天からの啓示！お母さんもう、これに応募しました(チラシを見せてすぐ後ろに隠す)」

ナカゴミ「な、なんだよそれ？隠すなよ、何に送ったんだよ！」

母親「エスポワール。希望の船。あなたはそこでギャンブルをしてもらうわ」

ナカゴミ「なんでだよ！両脇(上手と下手を指す)と流れが全然違うぞ！」

母親「ジョークよ。大丈夫、仙人の募集に送っただけよ」

ナカゴミ「そっちでも十分頭おかしいからな！」

コクブン「これで仙人になれる！」

フルサワ「仙人に転職しましょう！」

母親「仙人になりなさい！(チラシを渡す)」

ナカゴミ「ふざけんな！つうかこれなんか、書いてあることよく分かんねえよ！」

母親「だったらほら、地図を描いてあげたから！この場所に行くの！良いこと？仙人になるまで、家には絶対入れません！」

母親、地図をナカゴミに押し付けそのままはける。

ナカゴミ「おい！そもそも仙人ってなんだよー！」

五色(声)「仙人というのは…」

ナカゴミ「え？」

五色「私のことです！」

OP映像へ。

映像終了後、幕が開くと後ろに黒月天がいて、髭をいじっている。

黒月天「はじまりはじまり」

大きな銅鑼の音が鳴る。幕が閉じる。暗転。

【1幕 仙人ナカゴミ】

明転。

ナカゴミの家。母親がテレビを観て下品に笑っている。

母親 「ぎゃっはっはっはっは！ テレビ…ウンコ、だって…！ ギゃっはっはっはっは！」

チャイム音。再びチャイム音。ドアを叩く音。

母親 「何よ…良いシーンだったのに…」

母親、下手に移動し、鍵を開ける動作。仙人になったナカゴミが入ってくる。

ナカゴミ 「帰ったよ」

母親 「誰よあんた？」

ナカゴミ 「あなたの息子である」

母親 「は？ 私の息子はね、仙人の修行に耐えきれず死んでしまっているはずよ」

ナカゴミ 「酷いな母。本当の息子、ナカゴミ忠司だよ。母の予想を裏切り見事修行を終え、仙人になって帰ってきたんだ」

母親 「え？（顔をまじまじ見る）…あら？ あらあら？ あんた本当に忠司ちゃんじゃな…いいえー？ ちゃんと仙人になれたのね〜！」

ナカゴミ 「うむ。褒めるが良い」

母親 「立派になっちゃって〜！ でも母さん、忠司ちゃんが仙人になれるって信じてた！」

ナカゴミ 「死んでしまっていると断言されたばかりだがその言葉、信じよう」

母親 「あらあら〜それじゃあ何？ なんか仙人の術とか色々なことができるようになったんじやないの？ 見せなさいよ〜」

ナカゴミ 「うむ。焦るな焦るな我が母よ。今から我が仙術をお見せしよう」

母親 「楽しみね〜」

ナカゴミ 「むにやむにやむにやむにや、はっ！ 母にかけてみたよ」

母親 「え？ 私に？」

ナカゴミ 「私の術はランダムに効果が現れるのだ。効果は全部で4つあるよ」

母親 「あらあら面白いわね〜。今回は何が起こったの？」

ナカゴミ 「ふむ、今回は…かけた相手がカツラかどうか分かる効果が出たよ」

母親 「えー！ すごーい！」

ナカゴミ 「勿論母の頭はカツラではないという結果に…え？ カツラなのそれ〜」

母親 「そうよ〜これはカツラなのよ〜（カツラをかつぽかつぽする）」

ナカゴミ「衝撃的な事実、に後れをとらず、それではもう一回術を母にかけてみるよ。むにやむにや、はっ！」

母親「あらあら〜今度はどんな効果かしら？」

ナカゴミ「今度はかけた相手が男か女か分かる効果が出たね。勿論母は女という結果に……え？母ちゃん男なの本当は？」

母親「そうよく実はオカマだったの〜」

ナカゴミ「これ以上やるとまた知りたくない事実を知りそうだからこの辺でやめておこう」

母親「他にはどんな効果があるの？」

ナカゴミ「かけた相手の骨が全部折れるとかだね」

母親「すごい。そんな効果が出るかもしれない術を私にかけてたのね〜。でも、ホントに仙人になれたみたいで母さんも鼻が高いわ〜」

ナカゴミ「ホントは父さんだったけどね」

母親「それで、どうやってお金を稼ぐの？」

ナカゴミ「うむ？」

母親「いやだからね、その仙術を使って、どうやってお金を稼ぐのかなあってお母さん思っちゃって」

ナカゴミ「うーむ、うむ……うん」

母親「あら？もしかして仙人になったまではよかったけど、その後のことまでは考えてなかったの〜？」

ナカゴミ「うむ」

母親「出ていきなさーい」

ナカゴミ「うむ？」

母親「うむ？じゃねんだよ。結局何も変わってねえじゃねえか。クソニートのままか」

ナカゴミ「しかし、仙人というものはそんな金銭の価値で図ることは、」

母親「「ちや〜ちや〜ちや〜ちやうるせえっつもの。とにかく早くお金を稼いできなさいよ」

ナカゴミ「いやしかし、」

母親「うっせえっつもの。変な杖。変な髪型。変な名前」

ナカゴミ「名前はあなたが付けたのでは……」

母親「名字のこと言ったのよ」

ナカゴミ「それだったらあなたも同じでは……」

ナカゴミ、母親に悪口を言われ続ける。ナカゴミ、段々シユンとなっていく。徐々に弱明。母親がはけて、店長が出てくる。家↓コンビニに場転。明転。

コンビニ。下手端にナカゴミと店長がいる。

店長「ありがとうございます。それじゃあナカゴミ君、キミはこのままレジ打ちや
つて。私は裏で店長会議の資料を作ってるから」

ナカゴミ「うむ」

店長「うむ、じゃなくてはい、だろ。何度言ったら分かるんだよ、馬鹿」

ナカゴミ「はい…」

店長「(杖を没収する)…使えな」

店長、下手からはける。黒月天、上手から入ってきて、後ろの箱から缶コーヒー
を取り出す。

ナカゴミ「いらっしやいませー…」

黒月天「よっ」

ナカゴミ「あ、あなたは…黒月天様ではありませんか。コンビニをご利用になるのですね」

黒月天「元気にやってる？(杖を置き、缶コーヒーを渡す)」

ナカゴミ「(缶コーヒーを受け取ってレジ処理をしながら)いやあ…中々…」

黒月天「(小銭を渡しながら)そうかそうか。しかし、仙人の修行は果てしなく続く。負
けずに頑張るのだぞ」

ナカゴミ「…はい(缶コーヒーを渡そうとする)」

黒月天「おっと。そのコーヒーは頑張ってるお主にプレゼントじゃ」

ナカゴミ「黒月天様…」

黒月天「ほっほっほ」

黒月天、上手からはける。

ナカゴミ「俺、ブラック飲めないけど…よし！仙人、頑張ろう」

ナカゴミ、コーヒーを懐にしまい杖を持ち、仙人の雰囲気を出す。上手から拳銃
を持った強盗が入ってきて、レジに近づく。

強盗「金を出せ！」

ナカゴミ「うむ」

強盗「…いやうむ、じゃなくて。金、出せよ」

間

ナカゴミ 「あ、強盗か貴様」

強盗 「気付くの遅いなおい。そうだよ。さっさと金寄せせ」

ナカゴミ 「馬鹿な奴め。仙人相手に強盗とは…」

強盗 「ああ？」

ナカゴミ 「むにやむにやむにやむにや…はあああ…」

店長、下手から出てきて頭を叩く。

店長 「何しようとしてんだお客様に。クビにすんぞ。申し訳ございませんでしたお客様

(強盗に顔を向ける) …強盗だあ！」

強盗 「ベタかお前。なんだこいつら」

店長 「ナカゴミ君、強盗なら話は別だ、やってしまいなさい。面接で言っていた全身の骨が折れる術を使ってくれるかい？」

強盗 「そんな恐ろしいことできるのこいつは？」

ナカゴミ 「しかしその効果が出るかは分からないが？」

店長 「出るまでかけ続けようか」

ナカゴミ 「承知した」

強盗 「やべえコンビニきちやったよおい！」

ナカゴミ 「むにやむにやむにやむにや…(手を強盗の方へ向け目を瞑る)」

強盗、避けようとするがナカゴミの手、自動的に強盗を追尾する。

強盗 「やめろ！やめないと撃つぞおい！聞いてんかおい！…うん？」

強盗、ゆっくりと店長の後ろに移動する。

ナカゴミ 「はあ！」

店長 「ぐわあああああ!!!」

ナカゴミ 「店長ー!!!」

強盗 「こいつらが馬鹿でよかった」

店長、関節がぐにやぐにやして苦しむ。

ナカゴミ 「この効果は…！すまぬ、すまぬ店長…店長は、4つ目の効果で、ウーパールーパーを可愛いと思う頭になってしまったよ」

強盗 「どうでもいい効果だった。ていうかウーパールーパー別に可愛いだろ。やめろよ」

店長 「(スマホを見ながら) 可愛らしい…可愛らしいよお…！」
ナカゴミ 「くそう…！」

強盗 「お前さ、自分の術の効果もコントロールできないって仙人の才能ないんじゃない？」

ナカゴミ 「才能がない、だど？う…！(頭を押さえる)」

店長 「(素に戻って) 確かに私も思ってたよ。こいつ才能ねえなって。人としての。勿論仙人もだけど」

ナカゴミ、店長と強盗に挟まれながら悪口を言われ続ける。徐々に弱明していく。
店長と強盗、はける。コンビニ↓家に場転。

明転。

家。ナカゴミがテレビを観て下品に笑っている。

ナカゴミ 「ぎゃっはっはっはっは！ウンチ、だって…！ぎゃっはっはっはっは！」

母親、真ん中から出てくる。

母親 「忠司！いい加減に働きなさい！コンビニのバイトをすぐにやめおってからに！」
ナカゴミ 「うっせえババア！」

母親 「ジジイよ！こうなったらもうお前のそのヘンテコな術でびっくり人間大賞にでも出なさい！」

ナカゴミ 「はっはっは。もう仙術なんて全部忘れちゃいました〜」

母親 「このくただのクソニートに戻ってからに…！」

ナカゴミ 「へっへーん。やっぱりニートが、一番だぜ〜」

徐々に暗転。『ブツブツ』という効果音。

【2幕 仙人フルサワ】

明転。

フルサワの職場。舞台上にはフルサワ、部長、お局の3人。フルサワは常にハンカチ（黄色）を持って定期的に汗を拭く。↓これはその後の4幕と5幕でも。

部長「フルサワ君。上司が働く中とった休暇は楽しかったかい？まったく、よくこの忙しい時に有給休暇をとれたものだよ」

お局「部長。フルサワ君なんていてもいなくても一緒だと言っていたではありませんか」

部長「それもそうだな」

部長・お局「あはははは！」

フルサワ「……」

取引先の課長、下手から入ってくる。

取課長「お世話になります」

部長「これはこれは三角商事の大山課長」

取課長「おやおやおやく？フルサワさんが入社されているではありませんか。私、クビになっただかと思いましたがよ」

部長「大山さん。今からしても良いんですけどね、クビに」

部長・取課長「うしやしやしやしや！」

取課長「さてさて。それではフルサワさんには復帰記念ということでこれとこれとこれとこの（鞆から2つ、鞆ごと、後1つ未定、資料を取り出す）お仕事をお任せしようかな」

お局「大山さん。もっと多い方が良いんじゃないですか？」

お局・取課長「おへ。へ。へ！」

取課長「それでは、任せましたよ。全ては私の会社とあなたの会社のため」

フルサワ「いやだな」

部長・取課長「え？」

フルサワ「いやだな、と言ったんですよ」

取課長「…フルサワさんまさか、断るといいますか？私が持ってきたお仕事を」

部長「フルサワ、どういふつもりだ？」

フルサワ「部長、私は…仙人になった」

間

部長 「フルサワ、どういうつもりだ？」

取課長 「彼はいったい何を言っているんだ…？」

お局 「ストレスで頭がおかしくなったんじゃないの？」

フルサワ 「もう一度言います。私は、仙人になった」

顔を見合わせる3人。

取課長 「拍手をしながら）それはおめでどうフルサワさん。ただねえ。今この場は神聖な商談の場なんだよ。（フルサワに近づく）…おふざけなら外の公園でやりなさ、」

フルサワ、取課長に『はあっ！』と手を向けると、取課長が吹っ飛ぶ。

取課長 「あびよう！（倒れる）」

部長・お局 「えーっ！」

フルサワ 「私はこの度の休暇で仙人になった。これで、信じてもらえましたかな？」

部長・お局 「ああああ…（うろたえる）」

取課長 「（倒れたまま）なるほど、確かにあなたの言った通りのようだ」

取課長、むくりと立ち上がる。少し表情を変えるフルサワ。

取課長 「（拍手をしながら）おめでどうフルサワさん。本当に仙人になれたようだね」

フルサワ 「…どういうことですか？」

取課長 「なに、私も仙術を嗜んでいる。それだけだよ」

フルサワ 「なんですと…？」

部長 「なんですとはこっちの台詞だよ？大山さんまで何を言っているんですか？」

取課長 「果たしてあなたごときが私に、勝てるかな？」

部長 「無視ですか」

取課長 「はっ！」

戦いのBGMが入る。取課長、手をフルサワに向ける。見えないエネルギー弾がフルサワに飛ぶ。フルサワ、それを右手で受け止め取課長に押し返す。それを受け止める取課長。

取課長 「（受け止めながら）ほほう。ならばもう少し力を上げようか。はっ！」

取課長、再びエネルギー弾をフルサワに撃つ。フルサワ、それを右手で受け止め

るが今度は返せず、はじく。『ボカン』という効果音。

お局「どういうことなの？」

部長「多分だけど、なんかエネルギー弾的なものが2人の間で飛び交ってるんじゃないの？」

取課長「ならばこれならどうだ？はっ！はっ！」

取課長、右手左手で1発ずつエネルギー弾を撃つ。それをはじくフルサワ。『ボカン』『ボカン』という効果音。

取課長「ほう、まだ無傷か」

部長「会社の備品は無傷じゃないけどね」

お局「外の公園でやってほしいわ」

取課長「それならば最大出力だ…！はあああ…はあ！」

取課長、大きいエネルギー弾をフルサワに撃つ。フルサワ、それを両手で受け止め、そのままはじく。

取課長「何!!」

はじかれたエネルギー弾がお局に当たる。『ボカン』という効果音。

お局「(吹っ飛ばす) 私に当たるんかい、がくっ (そのまま倒れる)」

部長「(倒れたお局の脈をはかる) …死んでる」

フルサワ「次はこちらの番ですよ。サラリーマン仙術…!!」

取課長「な、何をするんだ…？」

フルサワ、取課長に近づく。

フルサワ「今回の件は、誠に申し訳ございませんでした！(お辞儀の頭が取課長に当たる)」

取課長「ぐわあああ!!」

フルサワ「これぞサラリーマン仙術。謝罪ヘッドバッドです」

取課長「ここにきて、物理攻撃なのか…がくっ (そのまま倒れる)」

部長「(取課長の脈をはかる) …死んでる」

フルサワ「次はあなたですよ、部長」

部長「くそ…大山さん…大山さん」

フルサワ 「すぐにあなたも同じところへ行けますよ」

部長 「せっかく…私好みの仙人に育て上げている最中だったのになあ…！」

フルサワ 「何…？」

部長 「しかしキミまで仙人になっていたとは。これもサラリーマンの性というものか」

フルサワ 「まさか…あなたも仙人…？」

部長 「ご名答！はっ！」

部長、エネルギー弾をフルサワに撃つ。それを右手で受け止めるフルサワ。

フルサワ 「そんな攻撃、私には効かないです、」

部長 「さらに！サラリーマン仙術、名刺手裏剣！」

部長、名刺入れから束になっている名刺を取り出す。開くと『ぼふん』という音と共に大きな風磨手裏剣になり、それをフルサワに投げる。フルサワ、地味に痛みを思わず右手を自分の方に向けてしまう。

部長 「その手を自分に向けて良いのかな？」

フルサワ 「しまった」

『ボカン』という効果音。フルサワ、吹っ飛び倒れる。しかしすぐに立ち上がる。

フルサワ 「く…！サラリーマン仙術、」

部長 「遅い！（フルサワに近づいて）サラリーマン仙術、ゴマ・すり！」

部長、フルサワについてテキトーに褒める。メタ的な感じも少し入れる。

フルサワ 「く…これは…お世辞…でも嬉しいですねえ…！心を許してしまいます…！」

部長 「ふふふ…！真のサラリーマン仙人とは外と内、両方から攻められる者のことよ！」

フルサワ、フラフラしながら汗を拭いている。

部長 「もう降参したらどうだ？汗だくじゃないか…待て、汗だく？お前、まさか…！」
フルサワ 「…お気づきになったようですねえ。そう、サラリーマンの汗は忍耐力の結晶。営業の外回りで出た汗。OL達の聞こえるか聞こえないかの陰口に耐える冷や汗。その全ての汗という忍耐エネルギーがこのハンカチにはたっぷり染み込んでいますよ」

部長 「お前そのハンカチ、いつから洗っていない…?」

フルサワ 「これ…元々は真っ白です!」

部長 「そこまで黄ばませるとは…! 一体その中にどれだけの忍耐エネルギーが込められているのだ…?」

フルサワ 「そしてこのエネルギーを全て解放しますよ! はああああ!! (ハンカチを口に含み、ゆっくりと部長に近づく)」

部長 「あ…あああ…許す…!」

フルサワ 「サラリーマン仙術、超謝罪ヘッドバット…!」

部長 「許すから、謝らないでくれ…!」

フルサワ 「(ハンカチを口から出す) 誠に…申し訳…:ごさいません! (深くお辞儀をした頭が一度外れる)…:でしたあああ!! (戻ってきた頭が部長の顎に当たる)」

部長 「ぐわああああ!! (そのまま倒れる)」

フルサワ 「(部長の脈を確認し) 死んだか…!」

フルサワ、合掌し、懐から辞表を取り出し部長の顔の上に置く。フルサワ、下手からはけようとしたところで、突然倒れていた取課長と部長が起き上がり、気持ち悪くフルサワに向かってくる。

取課長 「仕事仕事仕事」 部長 「会社のため会社のため」

フルサワ 「何…:はっ!」

フルサワ、手をかざし、取課長と部長を吹っ飛ばす。しかし再び立ち上がる2人。2人から距離をとるフルサワ。

フルサワ 「どういうことだ? いったい…:どういうことだと聞いているのです、お局の斎藤!」

お局 「(起き上がりながら) ふふふ…:ばれちゃったのね。そう…:私も、仙人よ。仙術で自分の脈を止めていたの。あなたの様子を観察するために、ね」

フルサワ 「…:いったいこの2人に何をしたのです?」

お局 「私の仙術で操っているの。お局はね、部署の人間のことを隙あらば観察し、ネタを探す。そうするとね、出てくるのよ。弱みの1つもね。そう、その弱みさえ握ることができれば上役だって思いのままに操ることができるのよ!」

フルサワ 「恐ろしい術だ…:! 人の粗ばかり探さないで仕事をしてくれお局…:!」

お局 「因みにこの世の全てのお局は同じことをしているわ!」

フルサワ 「だからどんな偉い人もお局には逆らえないのか…:! 全国のお局仕事をしろ!」

お局 「さ、無駄話はこの辺にしましょう…:か!」

フルサワ、取課長と部長に攻められる。

フルサワ「く…！サラリーマン仙術、名刺…しまった！会社への決別として名刺入れを捨ててしまったのだったあ…！」

フルサワ、徐々に圧されていき、とうとう2人に羽交い絞めにされる。そこに近づくお局。

お局 「あなたは頑張ったわ。仙人にもなつて。だけど、ここでおしまい」

フルサワ 「私を…どうする気でしょう？」

お局 「別に。もう二度と転職したいなんて思わない頭にしてあげるだけよ」

フルサワ 「何ですって…！」

お局 「サラリーマン仙術秘奥義、カムバック社畜ザワールド！（フルサワの頭に手を置く）」

音声 『皆はもつと働いているぞ』『よくやった。キミならこの仕事も、できるはずだ』『あなたがいないと、皆困るの』『土日？ゆっくり仕事ができるじゃないか』『会社の言うことを聞くだけで、良いんだよ』

フルサワ 「ぐわああああ!!」

お局、落ちているフルサワの辞表を持って、ビリビリに破く。

お局 「これであなたは明日から立派な会社の犬に逆戻り」

フルサワ 「う…うう…」

お局 「ねえ？社長」

黒月天、上手からぬつと出てくる。

フルサワ 「そんな…黒月天様、あなたが…社長…だったのですか…？」

黒月天 「うんまあ…ここしか出てくるタイミングがなかったのなやつなんだけど…うん、そんなキミにはこれをあげよう（名刺入れをフルサワに渡す）」

フルサワ 「これは…捨てたはずの…名刺入れ…がくっ（倒れる）」

お局 「明日からまたよろしくね、社畜ちゃん。おびやびやびや…」

黒月天 「仙人の修行は果てしなく続く…これに懲りずに、頑張るのじゃよ」

お局 「おびやびやびやびやびやびやびやびやびや！」

徐々に暗転。『ブツブツ』という効果音。

【3幕 仙人コクブン】

明転。

場所は山奥の家。舞台には仙人になったコクブン（仙人っぽさを出している）と男1。

男1「ありがとうございます。仙人様のおかげで買っている女がカツラだということが分かりました」

コクブン「役に立ててよかった」

男1「すっかり騙されてたな。流石は仙人様です」

コクブン「いやいやそんな。確かに仙・人ではあるけども」

男1「本当にありがとうございます。それでは、失礼します」

男1、上手からはける。

コクブン「うんうん！今日も私の仙人パワーを存分に発揮しちゃったなー！でもなあー私もそろそろ、そろそろ仙人として次のステップに進みたいんだよなー。例えば…」

無心、上手から勢いよく部屋に入ってくる。

無心「弟子にしてください！」

コクブン「こういうやつ！」

無心「え？」

コクブン「え？」

無心「あ、えっと…突然ですみません！僕は無心と申します。あなたが巷で噂になっている優秀な仙人、コクブン様でございますね。」

コクブン「えーいやーなにそれもー…如何にも私が優秀で頭のキレル仙人コクブンである」

無心「そんな仙人様をお願いがございます！僕を…あなたの弟子にしてもらいたいです！」

コクブン「…しかし、そのようなこと突然言われてもねえ」

無心「僕は生まれつき体が弱くて…だから仙人様の元で体を鍛えたいのです！お願いします！」

コクブン「しかしあれだよ？仙人の修行ってツライよ？特に私は…厳しいよ？」

無心「はい！望むところ、」

コクブン「（食い気味で）そこまで言うなら弟子にしよう！」

無心「ええ、ええと、あんまり意気込みとかを言えなかったですけど…良いのですか？」

コクブン 「十分伝わったよ、無心君から」

無心 「伝わってよかったあ。それでは、これからよろしくお願いします！コクブン先生！」

コクブン 「先生って…悪くない」

無心 「いやーでもあれですね。まさかこのような方が噂の仙人様だったなんて」

コクブン 「まあこんな女が仙人やってるなんて普通思わないよねー」

無心 「あ、いやそうではなくてですね。まさかこんな綺麗なお人が僕の先生になつてくれるなんてラッキーだなあって」

コクブン 「え？」

無心 「あ、いやすみません！失言でした！今のは聞かなかったことにしてください！」

コクブン 「ま、まったく…先生をからかうんじゃないよ！」

無心 「すみません！」

コクブン (声) 『ちょっとドキドキしちゃったじゃない…!』

コクブン 「さ、さあ早速修行開始だよ！」

無心 「はい！」

コクブン (声) 『こうして、私と無心君とのドキドキ仙人修行ライフが始まったの』

メロドラマ風のB M Gが流れる。

シーン①コクブンが無心を指導している。

無心 「はっ！やっ！はっ！」

コクブン 「違う違う。はっ！じゃなくて、はあやあつ、ね。手の位置もこう」

コクブン、無心の手を握って指導するが途中で、手をずっと握っていることに気付く。

コクブン 「あ！（ぼつと無心の手を離す）ご、ごめん。ずっと握ってて」

無心 「あ、いや、その…」

コクブン 「な、何？」

無心 「むしろこのままの方がよかったというか、なんというか…」

コクブン 「せ、無心君…」

無心 「先生…」

メロドラマ風のB M G。コクブンと無心、微妙な距離でもじもじしている。

シーン②無心が雑誌を読んでいる。

無心「へえ。最近仙人をモチーフにしたアイドルグループが生まれたんですね。この娘可愛いなあ。この娘も可愛い。この娘は…違うなあ」

仙人風アイドルが上手端に出て、テキトーに踊っている。

コクブン「(雑誌を覗いて) ふーん…無心君はこういう娘が好きなんだね」

無心「はい！」

コクブン「…それだったらうん、無心君はその娘の弟子になれば良いんじゃないかな？うん。思うに無心君は仙人の格好をしていればなんたって良いんだよ…(ぐだぐだ言いつける)」

無心「でも…」

コクブン「あ、別に良いんだけどね。無心君が誰を好きになろうと」

無心「僕は、先生が一番です」

コクブン「無心君…」

無心「先生…」

メロドラマ風のB M G。

シーン③コクブンの高校時代の先輩が舞台に現れる。無心はコクブンの少し離れたところからずっとそわそわし、コクブンと先輩の会話に合わせて大げさにリアクションする。

先輩「久しぶりだね春子ちゃん」

コクブン「先輩！お会いできて嬉しいです！」

先輩「春子ちゃん、仙人になれたんだったらさ…これから俺と東京で暮らさないかい？」

コクブン「え？」

先輩「ぶっちゃけ俺は今働いていない。けれど、春子ちゃんとなら大丈夫。そんな気がする」

コクブン「先輩…そういうすがすがしいところ、相変わらず素敵です！」

先輩「ははは、よせよ。それじゃあ春子ちゃん、今度こそ俺と一緒に」

コクブン「はい！…とは言えないんです先輩。今の私にはもっと大切なこと、いや、もっと大切な人がいるんです！」

無心「先生…」

コクブン「無心君…」

先輩「負けたよ」

メロドラマ風のB M G。先輩、肩をすくめてはける。

シーン④背中合わせのkokubunとむしん。

むしん 「先生…」

kokubun 「むしん君…」

kokubunとむしん、互いに向き直り、見つめ合う。そのまま2人、キスをしようとし照明も暗転しようとする時に真ん中から黒月天が現れる。ぱつと離れるkokubunとむしん。照明も元に戻る。

黒月天 「遊びに来たよー！…あれ？ワシ今邪魔しちゃった？ベタなやつしちゃった？ごめんね」

kokubun 「黒月天様…」

黒月天 「うんうんうん。そんな接吻をしようとしていたキミにはこれをあげよう（小物を渡す）、ブレスケア」

kokubun 「失礼だな！口臭くないですよ！」

むしん 「僕は先生の独特な口臭、平気ですよ！」

kokubun 「あれ？それは結局臭いってことなの？」

黒月天 「それじゃあ頑張ってるね」

メロドラマ風のB.M.G。黒月天、はける。

シーン⑤五色が舞台に現れむしんの修行を見ている。五色、なぜか少し訛っている。

kokubun 「むしんはどうでしょうかお師匠様？」

五色 「うむうむくとても筋が良いねい」

むしん 「ありがとうございます！」

五色 「ということはどうだろう？むしん君？小生の元で修行してみるといふのは？」

kokubun 「むしん・むしん」え…？」

五色 「悪い話じゃなくいいと思うけどねい」

むしん 「え、えっと…」

kokubun 「し、しかしむしんはまだ未熟の身ですので、いきなりそんなこと言われましても」

五色 「だまらっしゃい！小生はむしん君に聞いているのだ！元弟子が…あたしに逆らうんじゃないよ！」

五色、kokubunに手をあげる。しかしむしん、それを受け止める。

むしん 「五色先生。とてもありがたいお話です。しかし、僕はkokubun先生の元で修行を

したい。先生の元を離れる気は、ありません！」

五色「……負けたよ（肩をすくめる）」

コクブン「無心君……」

無心「先生……」

メロドラマ風のB M G。

五色「うんうん。チミ達の師弟愛は素晴らしいものだあ（上手はけ口まで進んで止まり、コクブン達の方を見ながら）なんですか今の私のキャラは……」

五色、はける。

シーン⑥コクブンと無心、なぜかお互い離れた位置で向かい合っている。

コクブン「無心君！」

無心「コクブン先生！」

コクブン「私は！」

無心「僕は！」

コクブン「キミのことが！」

無心「先生のことか！」

コクブン・無心「（口パクで好きだー!!と言う）」

メロドラマ風のB M G。コクブンと無心、勢いよく互いに近づいて抱き合う。しかし無心、突然苦しみ出し倒れる。B M Gが止まる。焦るコクブン。徐々に弱明。医者が出てくる。家↓病院に場転。

明転。

病院。下手に椅子に座っているコクブンとベッドで寝ている無心、上手に医者が座っている。

コクブン「それで先生、無心君の容態は？」

無心「容態って先生……そんな大げさな。ただ疲れが溜まっていただけですよ」

医者「いいですか？落ち着いて聞いてください。彼は今、重い病にかかっております」

コクブン・無心「え……？」

医者「病名はくっさいくっさい展開しちゃった病です」

無心「そんな……原因はなんですか？」

医者「いや名前の通りですよ。くっさいくっさい展開を続けていると発症してしまう病気で
す」

無心 「まったく心当たりが無い」

コクブン 「うん」

医者 「うーん…まあ大体こういうことしちゃう人達って自覚症状ないですからねえ、厄介なことに。無心さんは体が弱いので耐えられなかったようです」

コクブン 「な、直す方法は？」

医者 「(首を横に振る) 残念ながら現在の医学ではありません…」

コクブン 「そんな…」

医者 「そして真に残念ながら…彼の寿命ももう長くはありません」

コクブン 「そんな…!!」

無心 「…1年くらいですか？」

医者、首を横振る。

無心 「…半年？まさかもっと短い…」

医者 「今日です」

コクブン・無心 「今日」³³

医者 「はい、今日中です」

コクブン・無心 「いや、ちょっと」

医者 「それでは残されたお時間、悔いのないようお過ごしください」

医者、はける。

コクブン 「いや今日中って…じよ、冗談だよね？だってこんなにピンピンしてるのに」

無心 「ぐわあああ!! (急に苦しみ出す)」

コクブン 「えー」³⁴

無心 「せ、先生…僕は、もう駄目みたいです…」

コクブン 「…何言ってるの！私を誰だと思ってるの！仙人だよ！そんな病氣私がちよちよいと直してみせるんだから！はあああ!!」

コクブン、無心に向かって手をかざして力を送り続ける。しかし無心の苦しみは止まらない。

無心 「ぐわあああ!!」

コクブン 「なんで…私は仙人なのに…」

五色、上手端に出てきて2人の様子を伺っている。

無心 「ありがとうございます…ございました…とても楽しかったです…先生と過ごした半年間…」
五色 「あ、けっこう経っていたんですね」

無心 「先生とは…修行以外でもっと色々なことをしたかったです…遊園地で遊んだり、浜辺で追いかけてこしたり、動物園、水族館、ピクニック、ビール工場…！」

コクブン 「温泉とかもね」

五色 「あなた達仙人を目指しているんですね？」

無心 「全部、3回くらいしか行けなかったですもんね…！」

五色 「しかも行ってたんかい。けっこうな回数」

無心 「先生、覚えていますか？3回目の温泉の宿泊先で、部屋に布団が1つしか敷かれていなかったことをきっかけにし、照れながらもティッシュの位置を決め、僕達は、そこで、初めての、セ、ごほ…ごほごほ！」

コクブン 「無心君！」

五色 「何を言おうとしているんですか。ここで下ネタとは」

無心 「先生…愛しています…先生は…？」

コクブン 「馬鹿！私も、愛しているに決まっているじゃない！」

無心 「やった…これが聞けただけでも…良い人生だったと、言えます…先生…また…生まれ変わったら…お会い…しま…しょう…」

無心、動かなくなる。無心を抱いたまま泣いているコクブン。

コクブン 「何が…仙人だ…！愛する者も救えないで！何が仙人だ…！」

コクブン、うなだれる。上手から黒月天が現れる。

黒月天 「ほっほっほ。悲しい結末を迎えたようじゃのう、彼女」

五色 「ええ。他の者もやはり上手くいっていないようですね」

黒月天 「致し方なしじゃ」

五色 「それで黒月天様。彼らには渡して頂けましたでしょうか？」

黒月天 「バッチグーじゃ」

五色 「ありがとうございます。では私はこれを止めて参りますので黒月天様もお早目に」

五色、上手からはける。

黒月天 「ほっほっほ。(コクブンを見ながら) しかし五色君もやっかいな弟子達にしてしまったものじゃ。ここからどういうお話になるか…ゆっくり楽しませてもらう」

とするかのう。ではワシも、このまま退散するとするか。ほっほっほっほ

黒月天、真ん中からはける。

徐々に暗転。『ブツブ』という効果音。

【4幕 仙人修行中】

場所は山奥の五色の家。舞台には下手に五色、上手にコクブン、フルサワ、ナカゴミの3人が座っている。幕の間には黒月天の絵画がある（というか本物の顔が額縁に入っている）。
明転。

五色 「コクブン春子さん」

コクブン 「はい！」

五色 「フルサワ雄太さん」

フルサワ 「はい」

五色 「ナカゴミ忠司さん」

ナカゴミ 「はい…」

五色 「はい。事前の申し込みがあった3人で間違いないようですね」

コクブン 「はい！」

五色 「先ほど申しましたが私は中堅仙人の山戸五色です。今回は私の弟子の募集にわざわざこの蓬莱山まで集まってもらい、ありがとうございます。それでは早速あなた達がなぜ仙人を志したのかを聞かせてもらいましょうか、」

コクブン 「（立ち上がり食い気味に）はいはいはい！私はずっと昔から仙人に憧れていました！だから仙人になりたいのです！」

五色 「な、なるほど。元気があってよろしいですが…なぜ、コクブンさんは仙人に憧れたのですか？」

コクブン 「はい！それは私がまだ小さい頃、仙人様に助けてもらったことがあるからです」

五色 「ほう」

コクブン 「その仙人様は道に迷っていた私を父親のいる近くまで導いてくれたのです！」

五色 「それは良い出会いをされましたね」

コクブン 「はい！」

五色 「その仙人様とはどこか山の奥などでお会いしたのですか？」

コクブン 「いえ、近所の河川敷でした」

五色 「はい？」

コクブン 「その仙人様はぼさぼさの髭を生やし、服はボロボロで、橋の下のダンボールにいらっしやいました」

五色 「…それただのホームレスじゃないですか？」

コクブン 「その方は地図も見えないのに抜け道などを使い、スイスイ案内してくれたのです」

五色 「その人ずっとその土地に暮らしてるからではないですか？」

コクブン 「いえしかしその方、周りの方々からも仙人さんと呼ばれてましたよ？」

五色 「そういうあだ名のホームレスの方けっこういらっしやいますよ」

コクブン 「いえ！あの方は絶対仙人様でした！」

五色 「いえしかし、」

コクブン 「だって私が会った仙人様とはこの絵の方ですから！（黒月天の絵を指す）」

五色 「あ、ホームレスじゃなかった！黒月天様だった！なんであの河川敷のホームレス達と仲良くなってるんだ…！」

コクブン 「黒月天様とおっしゃるのですね！」

五色 「ええ…一応まあ、一番偉い仙人様です」

コクブン 「あ、だから絵を飾られているのですね！」

五色 「うんまあ…絵というか…ええ、もうそういうことです。えーとにかく。その幼少期の憧れを原動力にずっと仙人を志していたと？」

コクブン 「はい！もう家を出て10年くらい修行しています！今ではすっかり河川敷の皆さんとも仲良しです」

五色 「あなたがホームレスになってるじゃないですか。…まあ、仙人に対するやる気はありそうなのでそこは良いのですが」

コクブン 「はい！」

五色 「えー…それではお次はフルサワさん、お願いします」

フルサワ 「はい。（立ち上がる）私は現在、印刷関係の会社で営業マンをしています」

五色 「え？あ、サラリーマンの、方ですか？」

フルサワ 「はい。もう、今の会社には15年勤めていますねえ」

五色 「これはまた…サラリーマンと仙人、中々ピンとこないですけど」

フルサワ 「いえいえそんなことはありません。まず一般的に営業の仕事と言えば、いりもしない名刺の管理、OL達の陰口を聞く、イカレたお客さんの対応、というものじゃないですか？」

五色 「苦勞されたんですねえ」

フルサワ 「私はそういった仕事に我慢強く対応してきました。そして仙人に一番必要と言えることは何か？私は考えました。それはツライ修行に耐えるための忍耐力なのです。つまり営業の仕事と仙人の修行は、同じなんですねえ」

コクブン 「同じだあ…」

五色 「そんなに同じでもないですよ？仙人の忍耐力って禁欲とかですし」

フルサワ 「ということでは私は、15年間営業で培った様々なスキルを仙人活動でも活かせると考え、この場にやってきたのでございませう」

五色 「そうですね…因みに、その培ったスキルとはどういうものなのですか？」

フルサワ 「謝罪です（少し照れながら）」

五色 「なるほど…」

フルサワ 「あとは…頭を下げることです」

五色「同じことですよ？」

フルサワ「私の話は、以上です」

五色「はい：ありがとうございます。えー：では最後にナカゴミさん、お願いします。
なぜ仙人になろうと？」

ナカゴミ「別に：母親が勝手に応募しただけっすよ」

五色「なんかアイドルみたいですね。えー：それではあなた自身は仙人になる気はない
と？」

ナカゴミ「ないないない。だって俺、ニートだぜ？」

五色「うわ、説得力のあるお言葉」

ナカゴミ「：帰っていいっすか？」

五色「そんなんでよくこの山まで来ましたね」

ナカゴミ「ま、とりあえず暇だから来てみたけどこの2人の話聞いてたら冷めちゃいました
わ。俺、そういう熱い感じなの無理なんで。じゃ、そういうことで」

ナカゴミ、上手からはける。

フルサワ「これが今の若者ですか」

五色「一括りにしないであげてください：しかし、困ったことになりましたね」

コクブン「別に良いと思います！ニートなんて弟子にする必要ないですよ！」

五色「あなたもニートみたいな感じですけどね：しかし、そういうことではなく」

コクブン「え？」

五色「仙人にならないと、この山から出ることができないのですよ」

コク・フル「え？」

ナカゴミ、上手から戻ってくる。

五色「おかえりなさい」

ナカゴミ「ただいまー：え？は？何々？どういうこと？俺は確かに山を下ったぞ！」

五色「この蓬莱山は仙人の山。力の無い者が入ると抜け出すことができない、迷いの術
が常にかかっているのです」

ナカゴミ「はー：おいふざけんな！なんでそんな術かかってんだよ！」

五色「：仙人志望者を簡単に逃がさないためです。この仙人業界もね：弟子集めに必死
なんですよ!!!」

フルサワ「どこも人材不足なんですわねえ」

ナカゴミ「そもそも俺は志望してねえつつうの！母ちゃんが勝手に送っただけだつつう
の！……ふざけやがって！」

ナカゴミ、真ん中から勢いよくはけるが上手から戻ってきてしまう。

ナカゴミ「ちつくしよーい！」

五色「さあ。いい加減諦めて仙人になる覚悟を決めてください。大丈夫ですよ。あなた、
というかあなた達には才能がありますので」

コク・フル・ナカ「え？」

五色「あなた達の体には普通の人間には無い、仙人に必要な才能、仙骨があるのです」
コク・フル「ええ？そんなんですか（嬉しそう）」

ナカゴミ「は、はあ？何それ？俺は信じねえし、そんな胡散臭い話。俺に、仙人の？才能が
あるなんてさ（少し嬉しそう）」

五色「とか言いつつけっこう嬉しそうですね」

ナカゴミ「ていうか？なんでその仙骨ってやつが俺達の体にあるのか分かるんだよ？」

五色「それはあなた達が持っている仙人募集のチラシ。実はそのチラシ、仙骨を持つ人
間にしか中身を見ることができません。普通の人間では書いてある内容が読め
ないのです。つまりそのチラシをきちんと読んでここに応募できたということ
はあなた達には仙骨がある、仙人になる才能があるのです」

※コクブン、フルサワ、ナカゴミという順番に顔を向ける。顔を向けられた時、
持っているチラシを出す。ナカゴミは母親の描いた地図を出す。

ナカゴミ「…あれ？だったら、チラシを見て応募した俺の母ちゃんに仙骨あるんじゃないの
それ？」

五色「はい、私も説明しながらそれに気付きました」

ナカゴミ「えー？じゃあ何？俺だけその仙骨っていうの？」

五色「ナカゴミさん、この（フルサワが持つチラシ）チラシには何が書かれていますか？」

ナカゴミ「真っ白」

五色「じゃあ仙骨無しです」

コクブン「可哀想…」

ナカゴミ「憐れむんじゃないよ」

五色「（ナカゴミの地図を見ながら）なるほど、お母様が描いた地図を見てこの山まで
来られたんですね…というか詳しいですねこれ。来たことあるのかこの人」

ナカゴミ「いやいやていうかどうすんのこれ？俺才能なくて仙人になれないんだったら、一
生この山から出られないのかよ！おい！」

五色、ナカゴミを手で制しながらゆっくり黒月天（の絵）に近づき、耳を傾け『う
んうん』頷いたりする。

ナカゴミ 「うん？うん？なぜ、その絵に耳を？まるでそこから声が聞こえるみたいに」

五色 「はい！……親が仙骨を持っている場合、その子供が後に仙骨に目覚めることもあります！ですからそれを信じて修行しましょう！」

ナカゴミ 「えー…ホントに？そんな今とつてつけたような設定…」

コクブン 「まあまあ。どの道修行しないとここから出られないんだし！」

フルサワ 「そうそう。まだ若いんですから。何とかありますよ」

ナカゴミ 「完璧に他人事な感じだな…自分達には才能があるから…！」

五色 「そうですよ2人も。仙骨があっても仙人になる道は辛く辛く厳しいものです」

ナカゴミ 「じゃあ仙骨無い俺はどんだけツライんだろーね？」

コク・フル 「可哀想…」

ナカゴミ 「もういいよそれは！…ああもうしようがねえ。とりあえず話は聞くよ」

五色 「はい。それでは今からその仙人になるために必要な事柄についての説明を行います」

コク 「はい！」 フル 「はい」 ナカ 「はい…」

五色 「せっかくなので復習も兼ねてあなたに説明してもらいましょうか。りんず」

りんず 「はっ」

りんず、真ん中からスツと入ってくる。

五色 「彼女はりんず。別の仙人様の従者ですが修行の一環として今は私の元で学んでい

ます」

コクブン 「よろしくね！」

りんず 「りんずです。まだまだ半人前の仙人ですがよろしくお願ひします。先ほどから皆

さんのお話は聞いておりました。ホント碌なやついねえな」

コクブン 「うん？」

ナカゴミ 「何々何々？怖い怖い」

五色 「りんず。控えなさい」

りんず 「はっ」

五色 「それではりんず、仙人に必要な3つの要素の説明を」

りんず 「はっ。仙人は何よりも心・技・体、精神力・仙術・体力を鍛えることが必要となります。つまり仙人に見た目や品性は関係ありません。皆さん本当に、よかったですね」

コクブン 「なんだこいつー…どういう意味ー…」

フルサワ 「ふふ。私はそれくらいの罵倒、仕事で慣れていきますよ」

ナカゴミ 「可哀想…」

五色「いえ、フルサワさんの言う通りです。精神力とは自分の心の強さ。りんずの言葉ごとときで心を揺さぶられているようではまだまだですよ」

りんず「流石五色様。しかしさっきの見た目と品性の話はあなたも入ってますけど」

五色、ちらっとりんずの方を見る。

ナカゴミ「今ちよつと揺さぶられました？」

五色「ゴホン。そして体力とは自分の体の強さ。外から気を取り入れ体を鍛える。私は元より、華奢のように見えてりんずの体も隅々までかなり鍛えられています」

りんず「はっ、恐縮です。隅々までとはいつの間に私は体を見られていたのでしょうか気持ち悪ホントハゲてんなこいつ」

五色「……………そして仙術とは」

ナカゴミ「おー耐えた」

五色「自分の中の仙骨を使い、繰り出す超能力のような力です。それでは基本の気功術をお見せしましょう。はっ！」

五色、外に向かって手を勢いよくかざす。『ポカン』という効果音。

コク・フル・ナカ「おお〜」

コクブン「外の本に穴が空いた！」

五色「りんず、お前もやってみなさい」

りんず「はっ。はああああ……………はっ！」

りんず、幕の間にある黒月天の絵画に手を向ける。『ポカーン！』という効果音。

絵画（黒月天）、後ろに吹っ飛ばす。

五色「えー……………えー……………え、何やってんの？馬鹿なの？なんで黒月天様の絵をぶっ飛ばしてんの？」

ナカゴミ「もうすっかり揺さぶられている…」

りんず「いえ、顔がムカつくので」

五色「理由になっていないですよ？…良いですか？あなたは少しばかり、」

黒月天「痛いわー！」

黒月天、真ん中から出てくる。

コク・フル・ナカ「うわー！」

五色「あー…やはり本人でしたか…」

黒月天「なんだか顔が痛いよー！絵画に変化して？キミ達の様子を見守っていたら？気功術の餌食になるとはねー！ご立腹だよご立腹！一番偉い仙人様はね、ご立腹だよー！…という訳で一番偉い仙人の黒月天だよよろしく」

ナカゴミ「頭が…処理できない」

りんず「今みたいなどころ…ムカつくなー」

五色「りんず…！黒月天様、わざわざ変化の術まで使って様子を見に来て頂き、ありがとうございます」

りんず「…暇なんですか？」

五色「りんず…！」

黒月天「え？はあ？別に暇じゃねえし。多忙だし。超多忙。休み時間に見に來ただけだし」

五色「休み時間…？」

黒月天「3人を見ながら」ふむふむふむ…この3人に、ワシが加わって…ビートルズ？」

五色「どういことですか？」

黒月天「（フルサワのお尻をガツと掴む。しばらくずっと離さない）ふむ…中々良いのうフルサワ「ひい！これが仙人界の闇ですか…！」」

コクブン「ご年配と中年…悪くない！」

五色「黒月天様…ここまでの行いが自由過ぎるために皆さん誤解してしまっています。皆さん、黒月天様はフルサワさんの仙骨が良いと言っただけです」

コク・フル「え？」

五色「仙骨は上半身と下半身を繋ぐ臀部にあるのですよ」

黒月天「…そうじゃったっけ？」
フルサワ「ひい！ならば本当にお尻のことを…」

黒月天「冗談じゃよ（お尻から手を離す）。仙骨は仙人にとって最も大切なもの。ゆえにどんな仙人も仙骨のあるお尻が弱点となる。皆これを忘れないように」

五色「急に大事な話を入れましたね。えー…話がですね、だいぶ逸れてしまいましたが続きをしましょう。仙人に必要な3つの要素の話はしましたね？それでは今からその中の1つ精神力、自分の心の強さを知るための修行を行います」

黒月天「お、出た出た！最初にやるやつね」

五色「あなた達には自分の精神世界に入ってもらいます。その世界では自分はずでに仙人となっっています」

コクブン「え？もう仙人になれるの？」

五色「あくまで精神世界の中だけです。その世界で仙人となっただけ自身で好きなように過ぎしてみてください」

ナカゴミ「あれ？なんか急に楽しそうだな。そういう妄想的な話だったら得意だよ？俺ニートだもん」

コクブン「私もそういう仙人のイメージならバッチリ！」

フルサワ「私も得意です。頭の中でくらいしか、周りの人に文句を言えないですかねえ」

五色「フルサワさんは所々悲しいですね…しかし皆さん、理想の世界を保つことは難しいことなのです。段々とコントロールができなくなり、悲惨な最後を迎えてしまいかも…？」

ナカゴミ「いやいやまさかそんな。仙人になったはいいいけど、世間的に役立つ方法を模索できずアルバイトに身を落とすものの結局最後はニートに戻ってしまうとかそんな結末を迎える訳ないでしょうに」

フルサワ「ええ。まさか私が制裁を加えたいクソ共がことごとく仙術を使えて、結局最後は私自身が返り討ちに合って社畜に戻ってしまうなどという結末を迎える訳はないですよ」

コクブン「うんうん。まさか私が弟子をとってそれはまるで恋人のようになるけれど、」

五色「もういいですもういいです、なんか…もう大丈夫です。尋常じゃないですね…なんか、その、立て方が、フラグ的な…もうすでにやってきたんですか？」

黒月天「結果が楽しみじゃなく」

五色「ではりんず、精神の間へ3人を案内してください」

りんず「はっ。皆さんこちらです。死ね」

ナカゴミ「いちいちなんか付けなないといけない病気のかな？」

コクブン「お前が死ね！」

りんず、3人を誘導し真ん中からはける。そのまま3人も真ん中からはける。

黒月天「ふむふむ。中々個性的な3人じゃな。超多忙の中見に来てよかったわい。ホント

この後も多忙なんじゃよワシ、多忙。ホント最近ね、早寝早起き」

五色「それだったら健康的じゃないですか」

黒月天「ホント朝8時10分とかに起きるから」

五色「しかもそんな早起きでもないな。とにかくありがとうございました。自分のお仕事に戻って頂いて大丈夫ですよ。私はこれから彼らの精神世界での様子を覗きに行きますので」

黒月天「うむうむ。分かった。それではワシはこれからツタヤに行こうかの」

五色「暇なんですかやっぱり？」

黒月天「はあ？暇だし」

五色「暇なんですわね」

黒月天「暇じゃ！暇なのじゃ！だからワシも精神世界を覗きたい」

五色「まあ私は大丈夫ですけど」

黒月天「いやそれよりも…いっそ3人の精神世界に入っちゃおうかな」

五色「え？入れるのですか？」

黒月天「まあこれでも一応一番偉い仙人じゃからな」

五色「初めて素直に尊敬しました」

黒月天「なんじゃそれそれーい。というかすでに入っとるし」

五色「え？」

黒月天「そういえばワシの玉玉ちゃんは大事にしてくれているかのう？」

五色「誤解を招く呼び方はやめてください。宝玉ならば肌身離さず持っておりますよ」

黒月天「一安心。それじゃあワシはあの3人の世界にレッツらゴーしてくるわい」

五色「待ってください。それでしたら、その宝玉のことで黒月天様に1つお頼みしたい
ことがございます」

黒月天「ほいほい。申してみよみよ」

五色と黒月天、話しながら真ん中からはける。上手にコクブン、真ん中にナカゴ
ミ、下手にフルサワが出てくる。

3人、1〜3幕のダイジェストをやる。途中から五色がはけ口からその様子を見
ている。

フルサワ「これぞサラリーマン仙術」

五色「本当にサラリーマンと仙人を結び付けてきましたね」

ナカゴミ「相手の骨が全部折れるとかだね」

五色「こっちは恐ろしいこと考えていますね」

黒月天、舞台に出てきてナカゴミ↓コクブンという順に1、3幕のダイジェスト
進行。

五色「(黒月天を見て)自由にやっていますね」

コクブン「(1人3役で)無心君…先生…うんうん。チミ達の師弟愛は素晴らしいものだあ」

五色「なんですか今の私のキャラは…しかしコクブンさんは楽しそうですね」

黒月天、フルサワに近づき2幕のダイジェスト進行。1〜3幕の最後になる。ナ
カゴミ、フルサワという順に崩れ落ちていく。

五色「あの2人…見事に自分の言った通りの結末を迎えましたね…おや、コクブンさん
も」

コクブン「何が仙人だ！愛する者も救えないで何が仙人だ！」

コクブン、崩れ落ちる。五色と黒月天の会話、台詞はなくジェスチャーのみで（大げさにやる）スピーディーに。

黒月天 「悲しい結末を迎えたのう」

五色 「それで黒月天様。彼らには渡した？」

黒月天 「（バッチグーじゃ）」

五色 「では私はこれを止めて参りますので」

五色、舞台前方中央に移動する。

黒月天 「ワシも、このまま退散するとするかのう」

黒月天、真ん中からはける。

五色 「喝!!」

『ブツブ』とう効果音。『ぱっ』と顔を上げるコクブン、フルサワ、ナカゴミの3人。りんずが真ん中から入ってくる。

りんず 「皆さんお疲れ様です」

コク・フル・ナカ 「え？」

五色 「精神世界の修行が終わりました」

間

ナカゴミ 「あ、俺はもうニートに戻ったので（上手から帰ろうとする）」

フルサワ 「私も社畜に戻りましたので（上手から帰ろうとする）」

コクブン 「（五色に向かってくる）愛する者も救えないで何が仙人だ、」

五色 「（食い気味に）喝!!」

コク・フル・ナカ 「はっ！（我に返る）」

五色 「精神世界の修行が、終わりました」

コク・フル・ナカ 「あ：ああ：ああ、ああ、ああ、そっかそっかそっか！」

ナカゴミ 「あれ、心の中の世界だったんだ：恐ろしい：母ちゃんがオカマだった……！」

五色 「精神世界の話でよかったですね」

フルサワ 「恐ろしい：本当にお局が会社を支配しているのかと思いましたよ……」

五色 「それはあなたが間違ってもいないと思いますけどね」

コクブン「あのー…？その、今の私の精神世界って…見られていたのですか…？」

五色「…無心君、先生…！」

コクブン「ひえ〜！！」

五色「まあそうなるでしょうね。心の中完全に乙女でしたもんね」

コクブン「言わないでくれい〜…結局私は、自分の理想すらうまくイメージできなかったのよう…未熟者だ…」

五色「始める前にも言いましたが、自分の理想を保つのは難しいことです。人間は自分の力・成功を本気の本気で信じることはできません。一度その成功への猜疑心が生まれてしまうと段々と小さくなり、ついには身を滅ぼしてしまうのです」

りんず「今回の結果は仕方ないと思いますよ。皆さん喋るコンプレックスみたいな人間ですからね」

3人、ジロツとりんずを見る。

五色「修行を積み、この精神世界を10年以上保つことができた時…『ピンポン』という効果音が流れ、晴れて仙人とされるのです。そう、この修行は仙人試験の最終試験にも用いられるという訳です」

ナカゴミ「10年…！」

フルサワ「それは長いですねえ…サラリーマンが6回は転職を考えていますよ」

五色「しかし、です。ダイジェストとはいえ、半年間精神世界を保つことができたのは優秀ですよ、コクブンさん」

コクブン「え？あ、ありがとうございます！やったあ！」

五色「フルサワさん、あなたは時間こそ短かったですがその内容の密度はかなり濃く、サラリーマンと仙人の融合に期待が持てましたよ」

フルサワ「ありがとうございます…！」

五色「ナカゴミさん、あなたはあの、ニート、コンビニ、あの…お母様面白い顔してますね」

ナカゴミ「話全然変わっちゃった。フォローが思いつかなくて」

りんず「…どんまい」

ナカゴミ「とうとうりんずさんが優しい言葉かけてくる始末。ま、でもそうよな。俺はまだ仙骨が目覚めてないから仕方ないか」

りんず「この修行は心の強さを見るので、仙骨関係ないんですよ馬鹿」

ナカゴミ「はい。さっきの優しさ幻か」

五色「しかしそれは仙骨がなくても心と体は鍛えられるということですよ、ナカゴミさん？」

ナカゴミ「もう修行するのは確定か…分かったよ。山を出られる程度には頑張りますよ」

コクブン「とうとうキミもやる気になったようね！ま、私も負けないけどね！」
フルサワ「ふふ、私だって、まだまだ若者には負けませんよ！」（張り切り過ぎたポーズをとったため、腰を痛める）……湿布等は？」

五色「あの、無茶はせず、頑張りましょう。しかし皆さん、初めて会った時よりも良い面構えになりましたよ。それでは早速、フルサワさんに湿布を貼った後、仙人になるべく本格的に修行を始めますよ！」

コク・フル・ナカ「はい！」

ナレーション『こうして3人の辛く、厳しい修行の日々が始まった』

修行パート。BGMが流れる。役者はマイムで演じる。

①五色が3人に基礎知識を教えている。ナカゴミ、うつらうつら寝ている。フルサワ、じつと動かないで真面目に聞いているかと思えば、寝ている。コクブン、激しくノートにメモを取っているかと思えば、ずっと同じ動きをしながら寝ている。

②赤英が3人に基本の気功術を教えている。ナカゴミ、全然出ない。フルサワ、エネルギー弾が出たはいけど手の平から離れずオロオロしている。コクブン、コントロールを誤って、誰かに当たる。黒月天、その様子を見て心配したり『うんうん』と頷いたりしている。

③青虎が3人に武術を教えている。綺麗に正拳突きや蹴りを繰り返している。その間をタイミング良く進む黒月天。

④五色が1人座禅を組んで瞑想している。邪魔しようとする3人。しかし返り討ちに合う。そこに黒月天も加わりとうとするが五色にスルーされる。

⑤白仁季が3人の精神を鍛えている。3人は座禅を組んでいる。表情を崩しては駄目という指示のもと、白仁季、五色、りんず、さらには黒月天が3人を笑わせにくる。

⑥五色とりんずが見守る中、3人が三つ巴の戦いを行う。フルサワはサラリーマン仙術っぽい使っている。ナカゴミは1幕での仙人っぽさを出している。コクブンはとにかく無駄に動いている。

BGMが小さくなっていき、徐々に暗転していく。

ナレーション『月日は流れ…1年の時が経った』

【幕間】

明転。

舞台前方に五色と仮面を付けた白仁季。黒月天、『※少々真面目な話が続きます。ご了承ください』というめくりを指差している。

白仁季「弟子達の修行は順調そうであるな」

五色「はい。白仁季様ら3大仙人様達のご助力のおかげであります」

黒月天、五色に近づきジロツと見る。

五色「…勿論黒月天様のご助力も素晴らしかったです」

白仁季「どうした？ここには2人しかいないぞ？」

五色「いや、あと1人くらいいる気がします…」

白仁季「まあ良い。そして外部からの侵略者達の話だが」

五色「はい。宇宙人…エイリアン、ですね」

白仁季「うむ。最近奴等の動きも活発だ。油断できない状況となっている…」

五色「そのようですね。私も少々良からぬ気配を感じておりました」

白仁季「奴等との戦いまでにお前の弟子3人が戦力となってくれば良いが」

五色「間に合えますよ」

白仁季「それは頼もしい言葉。しかし五色よ。手は色々と打っておいた方が良い」

五色「…というと？」

白仁季「お前の持つ黒月天様の宝玉、あれを私に渡すのだ」

五色「…なぜです？」

白仁季「言った通り、エイリアン退治のためだ」

五色「…詳しくは教えて頂けないのですか？」

白仁季「黒月天様の玉を渡してくれたら教えよう」

五色「…ぜひとも詳しいお話をお聞きしたいところ…ですが、あの玉は黒月天様から預かった大切な玉。いくら白仁季様のお頼みでも聞き入れることはできません」

白仁季「ふう…頭の固いお前のことだ。私が土下座をしても黒月天様の玉を渡す気はないのだな？」

五色「残念ながら玉は渡せません」

白仁季「そうか。それはこちらも残念だ。前途ある若い仙人を傷つけなければならないのだから、な！」

りんず、下手から突然出てきて五色を攻撃する。しかしそれを止める五色。

りんず「…っ！」

白仁季「ほう。りんずに気付いていたか？」

五色「言ったでしょう？あと1人くらいいる気がする」と

りんず「（白仁季の隣に移動する）申し訳ございません、白仁季様」

白仁季「まあそんなに楽にいくとは思っていない」

五色「りんずが私の周りをこそこそ嗅ぎ回っていたことにはとっくに気付いておりましたよ。（懐から宝玉を取り出す）やはり狙いはこれですね？」

白仁季「それはお前のような中堅仙人が持っていて良い代物ではない」

五色「ではそんなに欲しいのなら…奪ってみればよろしいのでは？白仁季様」

白仁季「…生意気な小僧が」

五色・白仁季「はっ！」

五色と白仁季、互いに片手をかざし合う。壮大なBGMが流れる。

五色「この程度が…3大仙人様のお力なのですか？」

白仁季「まだまだ…ここからだ！」

五色と白仁季、かざした手を両手にし、力を出し合う。両者とも必死な形相。りんず、真ん中の幕から棒を受け取り『ぶんぶん』と軽くスイングしている。徐々に圧される白仁季。

白仁季「くっ…こんな若造に…！」

五色「腕が落ちたのではないですか…白仁季様！」

りんず、手に持った棒で空気を読まずに思いつきり五色のお尻を叩く。

五色「痛い！」

BGM止まる。さらに棒でめちやくちやに叩き続ける。宝玉、床に落ちる。

五色「痛い痛い…痛いですよ！やめなさい！そういうやつじゃなかったでしょ今！馬鹿！」

りんず、床に落ちた宝玉を拾い、白仁季に近づく。

白仁季 「仙人の弱点は仙骨のあるお尻。それはお前でも例外ではなかったようだな」
りんず 「宝玉です、白仁季様」

白仁季 「よくやったりんず。…完全に作戦通りだ」

五色 「ホントですか？だとしても相当情けない作戦ですよ」

白仁季 「別にさっきの得手、抜いてただけだしー」

五色 「急に小物クサクになりましたね」

白仁季 「なんとでも言うが良い。宝玉を手に入れた者が勝者なのだ！……うん？あれ？ちよっと待って（宝玉の匂いを嗅ぐ）…これ、宝玉じゃなくて…『すっばいぶどうにご用心』のやつだこれ！3つあってその中のどれか1つだけすっばいすっばいガムのやつだ！」

五色 「懐からガムの袋を取り出す」その通り、偽物です。食べても良いですよ？」

白仁季 「いらんわ！…本物はどこだ！」

五色 「3つに分けて隠しました。しかも1つずつ形を変えています。残念ながらここにはありませんよ」

白仁季 「…あの3弟子にか？」

りんず 「いえ、そんなはずはありません。ずっと山戸五色を監視しておりましたが、あの馬鹿3人に渡す機会など1度もなかったはずですよ」

白仁季 「しかしそれしか考えられん…！ふう…五色よ。この仙人界を変えたいとは思わんか？」

五色 「…急になんですか？」

白仁季 「お前が優秀なことは今の戦いでもよく分かった。どうだ？その宝玉の持つ力を使い、私と共に仙人界のトップに立とうではないか！」

五色 「…興味ありません」

白仁季 「しかし五色よ。あんなクソ爺がトップのままならば仙人界は腐っていく一方」

りんず、激しく頷く。

白仁季 「お前もそう思うだろ？」

五色 「……………（悩みに悩みぬく。そうはもう悩みぬき…）とにかくね、」

白仁季 「ほらほらー！否定しないじゃん！話題を変えようとするんじゃないよ！」

五色 「とにかく！このような手段で上に立とうするのは感心しません。それに…今の話を聞いて、白仁季様も持っていない意味がないと判断しました」

白仁季 「何？」

五色 「自分の力で強くなろうとしない者が宝玉を持っていても意味がないと言っているのですよ。よって…白仁季様。やはりあなたには渡せません」

白仁季 「ふん…ならば…先ほどの続きをするまでだ。（仮面を外す）はああああ…！」

白仁季、強大な力を出す。

五色 「なるほど…先ほど手を抜いていたというのはハッターリではなかったようですね。その仮面で力を抑えていたという訳ですか」

白仁季 「今素直に宝玉の在処を教えるのならば許してやるぞ？」

五色 「けっこうです。その代わり別のことを教えて差し上げましょう」

白仁季 「何？」

五色 「私は3人の修行をつけながら自らの修行も進め…ついに72の仙道を極めました！」

白仁季 「な、なんだと…！あの72の仙道を…！」

五色 「はい。72の仙道を、です」

白仁季 「…本当はまだ71じゃないのか？」

五色 「いえ、72です」

白仁季 「けっこう数え間違いとかもあるけど、大丈夫？」

五色 「大丈夫です。72です」

白仁季 「マジかよ…だからさつきもあんなに強かったのか…でもお前あれだぞ、そんなこと言って、本当は数え間違えてて戦って死んじやったら一番ダサいだし、逆に私 お前のこと心配してあげてる感じなんだけども、」

五色 「(食い気味に) さあ、もう良いでしょう！」

白仁季 「ふん、良いだろう…まずはりんず、ゆけい！」

りんず 「嫌です」

白仁季 「だろうねー」

五色 「大丈夫です。殺しはしません。ただ、しばらくは動けない体になってしまいうでしようが！」

五色、白仁季に向かう。徐々に暗転。

ナレーション 『山戸五色と白仁季、2人の壮絶な戦いから…10年の月日が流れた』

【5幕 仙人大集合】

音声『チーン』

場所は五色の家（今は3弟子の家）。舞台にはコクブン、フルサワ、ナカゴミの3人。簡易仏壇に3人、手を合わせている。ナカゴミは1幕のキャラになっていて少し老けている。

ナカゴミ「五色先生が亡くなってもう10年か…」

コクブン「やっぱり今でも信じられないね…先生が死んでしまうなんて…」

フルサワ「10年前の朝、今日は戦いになるかも知れないと先生は仰っていた」

コクブン「うん。まさかそれが私達の聞いた先生の最後の言葉となるなんて…」

3人、仏壇を見る。そして拝む。

ナカゴミ「しかしそんな昔のことをいつまでも話していても仕方がない。我々は我々でやるべきことをする。そうすることがあの世の五色先生に喜んでもらう一番の方法だろう」

フルサワ「そうですね」

コクブン「うん！」

ここからマイム。コクブンとフルサワ、修行を始める。ナカゴミ、箱からWiiを出してWiiスポーツで遊び始める。ナカゴミ、フルサワにも勧める。フルサワ、腰が痛いからと違うゲームにして2人で遊び始める。ナカゴミ、コクブンが修行で動き回るのがゲームの邪魔になると注意する。コクブン、謝り端の方へ移動する。急にコクブン、止まる。

コクブン「いや馬鹿か！」

フル・ナカ「え？」

コクブン「いや馬鹿か！お前ら馬鹿か！いや謝ったりして私も馬鹿かー！！」

フルサワとナカゴミ、じっとコクブンを見ているが再び遊び出す。

コクブン「いや止まって！なんでお前ら修行もしないでそんなグータラしてるの？」

ナカゴミ「今更何を言うのだ？3年くらい前からずっとこんな調子だろう？」

コクブン「あ、そっかあ…じゃない！だからそれが問題なの！」

「仙人募集中」

フルサワ「先生が亡くなってから、他の仙人様はぱったりと誰も指導をしに来てくれなくなりましたからねえ」

コクブン「だったら自分達で修行しなきゃ駄目だよ！こんなんであの世にいる五色先生が喜ぶ訳ないでしょ！」

ナカゴミ「そりゃあお前達は術の修行をしても良いだろうよ。なんだかんだで多少の仙術は使えるようになったのだから」

フルサワ「ナカゴミ君は一向に上達しませんもんね。不老の術も使えないから1人だけ10年分老けましたし。雰囲気だけは一番仙人なんですけどねえ」

コクブン「だったらもっと別の修行すれば良いじゃん！」

ナカゴミ「それとこれとは話が別だよ」

コクブン「ほら、仙人になれないといつまでもこの山を出られないよ？」

ナカゴミ「問題ない。ここにいればなんだってある。寝床も食料もプレステ2も **wii** も、

XBOX だってある」

コクブン「ゲーム機はちよつと古いよ！」

ナカゴミ「とにかく、そんなに急いで修行をする気はない」

フルサワ「まったく…その通りですよコクブン君」

コクブン「あ、向こうフオローしてたの？」

ナカゴミ「ではフルサワのおっちゃん。向こうで続きをしようぞ」

コクブン「あ、ちよつと！」

フルサワ「休める時に休む。これが長く働くコツですよ」

コクブン「あ、そっかあ…」

ナカゴミとフルサワ、下手からはける。

コクブン「じゃない！…いない！早い！あ…せめて別の仙人様でも来てくれたら…」

上手の幕、少し動いている。それに気付くコクブン。

コクブン「うん？この気配…誰がいる？まさか言ったそばから仙人様？なんて都合の良い、」

無心、上手からおずおずと出てくる。

無心「こ、こんにちは」

コクブン「あ、こんにちは…あはは……じゃなくて、誰？」

無心「えっと…僕はですね…」

コクブン「あれ？あなた、どこかで見たことが…？」

見つめ合うコクブンと無心。3幕のメロドラマ風のBGMが流れる。

コクブン 「君の名は…?」

無心 「僕は、無心と言います!」

コクブン 「無心…?…駄目!思い出せない!思い出すとなんか黒歴史的なものが蘇る気がする!でも…なんだか嬉しい気持ちにも…なる」

無心 「えっと…なんか大丈夫でしょうか?」

コクブン 「え?あ、うん!大丈夫大丈夫!それで無心君は何しにここへ来たの?」

無心 「えっとですね…その前に、あなたはもしかすると仙人様なのでしょうか?」

コクブン 「え?…:…:そう。私は仙人。仙人コクブンである」

無心 「すごい!やっぱり本当だったんだ!…仙人コクブン様!僕を弟子にしてください!」

コクブン 「え?弟子に?」

無心 「突然のお願いですみません…ですが僕は、仙人になりたいのです!」

コクブン 「デジャヴ…!なんか分かんけど…:…:こうなる流れが必然な気がする…!」

無心 「お願いします!」

コクブン 「でもね、仙人の修行はツライよ?特に私は…厳しいよ?」

無心 「望むところ、」

コクブン 「(食い気味で)そこまで言うなら弟子にしよう! (3幕よりさらに激しく)」

無心 「やったあ!ありがとうございます!」

ナカゴミ、下手からすたすたと歩いてくる。コクブン気付かない。

コクブン 「さあ!まずは手とり足とり…手とり足とり色々教えてあげよう、」

ナカゴミ、コクブンの頭をスパーンと叩く。

ナカゴミ 「何を勝手に進めてる?」

コクブン 「(無心に手を向けて)弟子にします」

フルサワ、真ん中からスツと出てきてコクブンの頭をスパーンと叩く。

フルサワ 「それは駄目でしよう?」

コクブン 「なんでー?なんか思ってた流れとちがーう」

ナカゴミ 「なんでもクソもない。俺達は弟子をとれる立場ではなからうが」

無心 「ちょ、ちょっと！コクブン先生に何をするのですか！（コクブンを庇う）」
コクブン 「無心君…」
無心 「先生…」

メロドラマ風のBGM入る。

ナカゴミ 「(天に) いやいやいやーいやキミね。こいつのこと先生って言ったけど、こいつはまだ、」

コクブン 「あーあー！まあまあまあ！いいじゃん！この子の夢壊さなくたってさあー！」
フルサワ 「でもそういうのは感心できないですねえ」

無心 「え？そんな、もしかして…？」
コクブン 「いや、あのね無心君…」

無心 「先生とこんな対等にお話してるということはまさか…お2人も仙人なのですか？」
「」

コク・フル・ナカ 「え？」

無心 「すごい！まさか3人も仙人様に会えるとは！すごいぞー！うおお!!」

ナカゴミ 「いやあのねキミ、よく聞いて」

無心 「あなたはいったいどんな仙術を使えるのですか？」

ナカゴミ 「え？仙術？」

無心 「はい！」

コクブン 「ごめんね無心君。この人まとな仙術、」

ナカゴミ 「使えますけどー？やめてくれますー？勝手なあなたの主観でお話するのー？」

無心 「見せてください！」

ナカゴミ 「…それでは、ひよこを召喚します。ぼふん」

ナカゴミ、ひよこのモノマネをする。(こ役者さんの特技で)

無心 「…すごい！」

コクブン 「確かに！」

フルサワ 「えー…？まあ特技的な意味ではスゴイですけどそういうお話でしたっけ？」

無心 「流石は仙人様です！」

ナカゴミ 「そう、流石なんだ俺は。無心と言ったね。見る目がある。今日から俺の元で修行をさせてやろう」

無心 「ありがとうございます！」

コクブン 「ちよっと！無心君は私の弟子よ！」

フルサワ 「いやいや2人とも、冷静になってくださいよ」

無心 「あのう、あなたの仙術も見せてください！」

フルサワ 「おっとっと、その手は食わないですよ。無心君と言いましたか？私はこの2人のように甘くはありません。これでも社会人経験者ですからねえ」

無心 「え？社会人から仙人になったのですか？すごい！」

フルサワ 「はははありがとうございます。と言っても謝ることが仕事の営業マンでしたが」

無心 「すごい！」

フルサワ 「うん？」

無心 「いくら仕事とは言え…その謝ることが難しいのに！普通はそんな簡単にはできませんよ！僕はどんな状況でも謝ることができる人が本当の意味で一番強い人だと思っています！だから僕は、あなたを尊敬します！」

フルサワ 「…（ツツと涙が流れる）」

コクブン 「泣いた！」

ナカゴミ 「これまで仕事で褒められたことがなかったのだなきつと…」

フルサワ 「いやしかし！弟子にするかどうかは別の話！そんなに社会は甘くありません！」

ナカゴミ 「おっと案外しぶといぞこのおっちゃん」

フルサワ 「そもそも私のサラリーマン仙術も見ないで、」

徐々に弱明していく。コクブン・フルサワ・ナカゴミが下手に3人、その向かいに無心という位置取りになる。
明転。

フルサワ 「それじゃあ改めて、今日から私達3人の弟子になる無心君です。皆、拍手」

ナカゴミ 「（拍手しながら）うん、長かったからカットされた感じかな」

コクブン 「え？」

ナカゴミ 「こっちの話だ」

無心 「よろしくお願いします！」

コクブン 「ねえねえ。でも無心君はなんでここに仙人がいるって知ったの？」

無心 「えっとそれは…これです！（3人にチラシを見せる）」

ナカゴミ 「うん？これは…」

無心 「たまたま拾ったのですが」

コクブン 「このチラシ…懐かしいなー！仙骨がないと内容が読めないチラシだ！」

フルサワ 「ええ。流石五色先生のお手製ですねえ。10年以上経っても中身が色あせてない」

コクブン 「どう？ナカゴミ。今のキミだったら少しは書いてあることが読めるんじゃない？」

ナカゴミ 「うん、ぼんやり、ぼんやりとだけ読める気がするよ。…あ、この辺に地図が描

いてあるね？」

フルサワ 「そこには文字しか書いてないですね」

ナカゴミ 「はい、気のせいでした。10年経っても未だ仙骨に目覚めない俺だよ」

コクブン 「でもこいつと違って無心君はこのチラシが読めたってことだから、仙骨、仙人になる才能があるんだよ！」

無心 「そうなんですか？やったー！」

ナカゴミ、無心に地味な嫌がらせをする。

フルサワ 「おや？会社のOL間でよく見た光景ですよこれ」

コクブン 「ナカゴミ！」

ナカゴミ 「ふーん」

フルサワ 「まあまあナカゴミ君もその辺にしましょう。それでは早速、仙人に必要な3大要素の話などをしましょうか」

無心 「はい！お願いします！」

ナカゴミ 「おっとこれはまたカットの予感」

フルサワ 「そもそも仙人とはですね…」

間 4人、じつと固まって動かなくなる。

無心 「なるほど！大変勉強になりました！」

ナカゴミ 「とうとう照明すらも変わらなくなったね」

フルサワ 「本当はこの後今話した精神世界に入ってもらうのですが…やり方も分からないですし」

コクブン 「だったらもう、実践に入っちゃおうよ！」

フルサワ 「そうしますか」

無心 「はい！よろしくお願いします！」

コクブン 「それじゃあまずは基本の気功術をやるよ！今から私がやる見本をよく見てね。はっ！」

コクブン、手をかざし気功術を見せる。『ポカン』という効果音。

無心 「おー！外の木に穴が空いた！」

コクブン 「じゃあ無心君、今のを真似してみて」

無心 「はい！はああああ…はっ！（手をかざす）」

何も起こらない。

ナカゴミ 「ふふふ。まあねえ。初めのうちは、」

遅れて『ボツカーン!』という大きな効果音。その後『ボカン、ボカン…』という連続音がある(徐々に遠くなっていく)。あつけにとられる3人。最後は花火の終わりっぽい効果音。

ナカゴミ 「え?花火?」

無心 「どうでしょうか?」

ナカゴミ 「う、うんうん?いやなんか、うん…発動するが遅かったかなあ」

コクブン 「すごいよ無心君!」

フルサワ 「ええ。これはきつと優秀な大学を出てますね」

無心 「ありがとうございます!」

ナカゴミ 「まあ今のは基本中の基本中の基本だからさ。次はこうはいかないよ?」

無心 「はい!」

ナカゴミ 「じゃあ次は仙術で物を動かしてみようかうん。フルサワのおっちゃん」

フルサワ 「じゃあ見本を。はあああ…」

真ん中から黒子が出てきて、物を宙に浮かせる。フルサワ、徐々に必死の形相になっていく。

フルサワ 「ふう…(物が元の場所に戻る)」

ナカゴミ 「真似してみなさい無心」

無心 「はい!はああああ…(いきなり必死の形相)」

ナカゴミ 「いや別に顔は真似しなくていいよ」

黒子、物を動かそうとするがナカゴミに無言で止められる。物は動かない。

ナカゴミ 「うむうむ。さっきのは…ビギナーズラックだったみたいだねえ」

コクブン 「…あれ?なんか浮遊感みたいなのない?(舞台端の窓に近づく)…あの皆さん…

この家が浮いてる!!」

フル・ナカ 「はあ…(黒子も驚く)」

フルサワ・ナカゴミ・黒子の3人、窓に近づく。無心、夢中で気付かない。

コクブン 「無心君!も、もう止めて大丈夫だよ!」

無心 「あ、はい（急に止める）」
ナカゴミ 「馬鹿！急に止めるな！」

黒子を含めた5人、その場で家が落下して着地するのをマイムで表現する。

無心 「どうだったでしょうか？」

ナカゴミ 「うん？うん、あの…いや、違うの動かしちゃ駄目だよ、うん」

無心 「次は！次はいつたいどんな修行を行うのでしょうか？」

ナカゴミ 「オーケーオーケー。じゃあちよつとき、一旦休憩にしようか。俺達はさ、今後について話し合うから。無心は奥の部屋に行っていなさい」

無心 「はい！」

ナカゴミ 「(下手の部屋へ案内しながら) あ、戸棚の上にあるふ菓子とか勝手に食べて良
いからね、うん」

無心、はける。ナカゴミ、戻ってくる。

ナカゴミ 「これどうするー？マジで」

フルサワ 「まあ正直あの力は私達ではどうすることもできないですねえ。困りました」

コクブン 「そうね…どうやったらかう、もっと手と手とが密着的な修行ができるんだろう…」
ナカゴミ 「お前だけ悩みの論点違うくない？」

りんず、スツと出てきて3人の会話に加わる。

りんず 「ではこういのはどうでしょう？」

コクブン 「何々？」

りんず 「あなた達の持っている山戸五色の宝玉を私に渡すというのは？」

ナカゴミ 「いやいやいや…なんで急にそんな話になるのだい、りんずさん」

フルサワ 「流石に今のはフォローできませんよりんずさん…」

コク・フル・ナカ 「りんずさん！」

りんず 「皆さんお久しぶりです。使い古された気持ちの悪い反応ありがとうございます。

おえっ (嗚咽する)「

フルサワ 「サラリーマン時代を思い出すこの感じ…りんずさんだ」

コクブン 「ちよつと！いきなり現れて宝玉って…いったいなんのこと？」

白仁季 (声) 「とぼけるのはその辺りにしてもらおうか」

白仁季、上手から出てくる。

コク・フル・ナカ 「白仁季様！」

白仁季 「お前達が山戸五色の宝玉を持っていることは分かっている。さあ、大人しく渡せ」

3人、互いに見合って本当に何のことか分からない反応をする。

りんず 「本当に何のことか分からない顔をしておりますね」

白仁季 「いや、そんなはずはない。だとしたら山戸五色がこの蓬莱山へかかる迷いの術を

最後に強めた理由が説明できない」

コクブン 「最後…？」

りんず 「それは確かに…そのせいでこの場所は力のある仙人の侵入が妨げられるようになりましたからね」

白仁季 「まったく…迷いの術が薄れるのを待つのに10年もかかってしまったわ」

コクブン 「ちよつと待つてください…最後つて、どういうことですか？五色先生の最後について何か知っているのですか…？」

白仁季 「うん？そうか山戸五色は…ふっふっふ。ざまあないな」

コクブン 「まさかあの時、10年前五色先生と戦った人というのは…！」

白仁季 「…別にお前らは知らなくても良いことだ」

コクブン 「それでは白仁季様…！あなたが五色先生を…！」

りんず 「おしゃべりはそこまです。私達は黒月天様のように暇ではない。あなた達のすることは1つ。宝玉のありかを教えるのか、教えないのか…？」

ナカゴミ 「えー…？そんなこと言われても…知らんし…」

コクブン 「く…！よくも先生を…！」

白仁季 「なんだ？その反抗的な目は？まさかとは思うが我々に逆らおうと言うのか…？
師匠と同じで血気盛んな弟子達だな」

コクブン、白仁季とりんずに攻撃しようとするが、フルサワに止められる。

フルサワ 「相手は3大仙人の1人。考え無しで挑むのは感心しませんね。ここは私に任せてください」

コクブン 「でも…！」

フルサワ 「とりあえず…謝罪します」

コクブン 「なんでだよ！こつち何も悪くないよ！」

フルサワ 「社会に出れば悪くなくても謝ることは幾らでもありますよ」

白仁季 「いやこつちも謝られても困るぞ？宝玉を渡せつて」

無心、巨大サイズのふ菓子を持って戻ってくる。

無心「あのこのふ菓子、大きすぎるし固すぎるしでどうも、ってあれ？どうしたのですか？」

白仁季「うん？」

コクブン「無心君、来ちゃ駄目…！」

ナカゴミ「うむ…説明するのがかなり面倒くさい状況なのだが…（無心をじっと見る）あ、そうだ。名案がぴーんと降りてきたよ」

コクブン「え？」

フルサワ「なるほど。4人で謝罪かな？」

ナカゴミ「全然違うよ。一回謝ることから離れようか」

白仁季「なんだそいつは？」

ナカゴミ「こいつは我々の弟子、無心」

白仁季「弟子だと？お前らが？」

ナカゴミ「うむ。白仁季よ。よく聞くが良い。我々はこの10年で成長し、力を付けた。それはもう弟子の1人や2人簡単にとれる程に」

りんず「思い上がりもここまでくれば滑稽ですよ」

ナカゴミ「ふふふ…思い上がりかどうか今から証明してやろうぞ、この弟子を使ってな（無心の肩に手を置く）」

無心「え？僕ですか？」

りんず「よもやその者と白仁季様を戦わせようというのですか？」

ナカゴミ「そうだ。無心、あの者と戦いなさい。これも修行の一環。あの者も我々と同じ仙人。思う存分にやっつて大丈夫だ」

無心「はい！分かりました！」

コクブン「ちよっと！」

無心「コクブン先生。僕、頑張ります！」

コクブン「無心君…」

白仁季「お前達…あの五色の弟子ということで少しは買っていたが…自分達の弟子を身代わりに使おうとは見損なったわ！」

無心、近づいてきた白仁季に強力な気功術を放つ。ビシッと直立する白仁季。その後ゆっくり倒れる。

りんず「えー…死んでる」

白仁季「いや死んではないけど」

ナカゴミ「これが我々の弟子の強さだよ」

コクブン 「無心君…素敵…!!」

白仁季 「くそくなんで私はいつもこんな目にあうのだく…」

フルサワ 「よーしよし。これで五色先生の仇はとれましたね、皆さん」

りんず 「は？なんですか？仇とは？」

コク・フル・ナカ 「え？」

フルサワ 「10年前、あなた達が五色先生を襲い、五色先生を殺したのですよね？」

白仁季 「うん？いやーまあやっただけやっただけ言うか…」

りんず 「いえ、あの時白仁季様は山戸五色にボコボコにやられていました」

白仁季 「はつきり言うなよ」

コクブン 「あれ？じゃあいったい何が原因で五色先生は…？」

無心 「あの…この方が3大仙人様なのですか？」

ナカゴミ 「うむ。一応な」

無心 「そうですか…ふっ…！ふふっ…!!」

コクブン 「え？どうしたの無心君？」

無心 「いえ…すみません。笑いを堪えることができません…。この程度の者が3大仙人の1

人だとは…地球の仙人も底が知れると思ひまして」

りんず 「何？」

コクブン 「無心君…！ごめんね、かつがりさせちゃって」

ナカゴミ 「我が弟子をがっかりさせるな！白仁季よ！」

白仁季 「ごめんなさい…」

りんず 「おい！白仁季！しっかりしろ！」

白仁季 「え？」

りんず 「今の発言といい先ほどの強大な力といい、この男まさか…外からの侵略者、エイ

リアンですか…!!」

コク・フル・ナカ 「エイリアン…!!」

コクブン 「あなた頭は大丈夫？」

フルサワ 「そういう妄想話を受け入れてくれる程社会は寛容じゃないですよ？」

白仁季 「ヒクわー」

りんず 「だからおい白仁季！あなたまでなんですか！」

無心 「ふふふ。そいつは僕の受けた術によって超駄目仙人になってしまったんだよ」

りんず 「なんですって…？」

無心 「まあ後は雑魚でもしかいないようだし、教えてやろうか。その通り。僕はこの地

球を侵略してきた(頭を真ん中の幕に入れ、触手を頭に付ける)、エイリアンだ」

コク・フル・ナカ 「え？」

無心 「我々の脅威となる仙人どもの宝玉を奪いにきたんだよ」

りんず 「く…!!こいつも私達と同様、山戸五色の迷いの術が薄れたせいでこの蓬莱山にた

どり着けたのですね…!」

ナカゴミ 「まさか…本当なのか？」

りんず 「そうですよ! こういうこと座学で勉強したでしょう？」

ナカゴミ 「…寝てたからなあ」

無心 「ふふふ。お前達も面白いくらい綺麗に騙されていたな」

コクブン 「…嘘でしょ? 無心君」

無心 「無心? ああ、こいつのことだったな。この姿は変化の術で化けた姿。お前の頭を覗き、最も油断を誘う相手に変化したまでよ」

コクブン 「そんな…」

無心 「地球の超能力者である仙人…もっと厄介な存在だと考えまずは様子を見ていたが、中々どうして僕達は仙人どもを少し過大評価し過ぎていたようだな」

白仁季 「そうだそうだ! 私達はそんなに強くないぞー! 弱いぞー! クソだぞ、」

りんず 「(白仁季にビンタする) 馬鹿! これ以上醜態を晒さないでください!」

白仁季 「だって〜(りんずの往復ビンタを食らい続ける)」

無心 「さあお前達、僕に宝玉を渡せ。さもなければ1人1人命を落とすことになるぞ?」

ナカゴミ 「えー…ちよつとマジ勘弁なだけけど…」

コクブン 「どうすれば…」

フルサワ、スツとナカゴミ達を手で制し、ゆっくり無心の前までやってきてそのまま綺麗に土下座をする。その後ゆっくり顔を上げる。

無心 「うん…謝れば何とかなると考えているお前から痛い目にあってもらおうか!」

フルサワ 「何とかならないの?」

無心 「はああああ…はあっ!」

無心、フルサワにエネルギー弾を撃つ。『バシユーン!』という効果音。

暗転。

コクブン・ナカゴミ 「おっちゃーん!!」

フルサワ 「はい」

コクブン・ナカゴミ 「え?」

明転。

舞台上黒月天、赤英、青虎が出てきている。青虎、フルサワに向けられたエネルギー弾を受け止めている。

無心「何？」

フルサワ「(青虎を見て) 青虎様ー！」

コクブン「(赤英を見て) それに赤英様まで！」

ナカゴミ「(黒月天を見て) ……皆さんお久しぶりですね」

黒月天「あれ？ワシの名前はー？」

赤英「(ぐったりしている白仁季を見ながら) 白仁季…酷くやられたようだね…」

ナカゴミ「うむ。大体りんずさんのビンタだったが」

青虎「まったく…出世ばかり考えているから…あの…腕が、落ちるのだ(プルプルしている)」

ナカゴミ「あれあれ？でも青虎様の腕もめっちゃプルプルしてるけど大丈夫？耐えきれない感じ？」

青虎「この程度の…エイリアンごときに…やられるとは…(さらにプルプルしている)」

赤英「青虎の言う通りだよ」

ナカゴミ「うん普通に会話してるけど、え？誰かこれ助けてあげた方が良いのでは？まず皆見てあげてこれを」

青虎「情け…ない…！無理！(結局耐え切れない)ぐわー!!」

ナカゴミ「ほらー！」

青虎、白仁季の横に倒れる。

黒月天「うん…手当してあげよう」

りんず「はい…」

黒月天とりんず、白仁季と青虎を順番に担いで、裏へはける。

無心「ふふふ。これで2人目だ」

赤英「貴様…！白仁季に続き青虎までも…！許さない！」

ナカゴミ「いやあなたたちよつと前、青虎様助けられましたよ？」

赤英「しかし…私をあいつらと同じだと思わない？」

ナカゴミ「うん？これも負けちやうやつじゃない？大丈夫？」

赤英と無心、戦い合うがけっこう良い勝負をする。ダイジェストっぽく動く。

ナカゴミ「あれ？予想に反して…」

フルサワ「良いですよ！善戦していますねえ」

無心「なるほど…地球にも骨のある仙人がいるじゃないか(上手から装置を取り出す)」

コクブン 「何あれ？」

無心 「(装置を付ける) これは仙骨スカウター。仙骨の強さ、つまり仙人の強さがそのまま数字で分かる装置だ。これでお前らの強さを測らせてもらう」

ナカゴミ 「おっとー嫌な予感するよ」

無心 「なるほど…お前(コクブン)の仙骨数値は1500、お前(フルサワ)は1200、お前(ナカゴミ)は…:…:お前は(赤英)、」

ナカゴミ 「うんうんうん、せめて数字を言ってくれ。ちゃんと受け止めるから」

無心 「2だ」

ナカゴミ 「2:…:2:」

コクブン 「ホントに仙骨ないんだね」

無心 「そして肝心のお前(赤英)は…:12万だと:」

コクブン 「流石赤英様！」

フルサワ 「3大仙人の名は伊達ではなかったですねえ」

赤英、ちよつと照れる。黒月天、おずおずと舞台上に戻ってくる。

黒月天 「あのー…:…:ワシは？」

無心 「え？」

コクブン 「そうだ！黒月天様もいる！」

フルサワ 「一番偉い仙人様ですもんね！」

ナカゴミ 「うむ…:このパターン、どっちなんだ？」

無心 「貴様の数値は…:12万2」

黒月天 「よっしゃああああ!!勝ったああああ!!(しばらくずっと喜んでいる)」

コクブン 「2でも勝ってよかったですね！」

無心 「いやその差はもはや誤差だろ」

ナカゴミ 「誤差とか言うのやめて。一応2って俺の数値だから」

無心 「しかし喜んでいるところ悪いが、僕の強さは20万だ」

コク・フル・ナカ 「何:」

赤英 「そんな数値なんてどうでも良いよ」

無心 「ふん。負け惜しみを」

赤英 「これ以上時間をかけても仕方ないね…:それじゃあ私の本気を、見せてやろうかな」

無心 「な、何:まだ本気ではなかっただどー:」

黒月天もそれを聞いてめっちゃ動揺する。

赤英 「私も仮面で力を抑えているんだ。(仮面に手をかける) これを取ることで、私は

無心 「この世で一番強い存在へと変化するんだ！（仮面をとる）」
無心 「この世で一番強い存在…」

黒子が出てきて赤英の頭にカツラとエプロンを取り付け、杖を回収する。

無心 「仙骨の強さ…100万だと…！なんて力だ…！」

フルサワ 「た、確かに凄まじい力を感じますが…しかし…」

コクブン 「何なのあの姿…？」

ナカゴミ 「母ちゃん…」

コク・フル 「え？」

ナカゴミ 「何やってんだよ母ちゃん！」

赤英 「そう。この世で一番強い存在とは子を持つ母親。忠司…あなたの母親という姿はこの母親パワーを得るためにしていた仮の姿だったの」

ナカゴミ 「え、ええ…じゃあ本当にオカマだったの？」

赤英 「衝撃的な事実をごめんね。でも、もう1つ、あるの」

ナカゴミ 「もうやめてくれ…」

赤英 「あなたは…私の本当の子供じゃないわ！」

ナカゴミ 「NO——！！」

赤英 「今まで隠して…ごめんなさい」

コクブン 「そうだったのね…」

フルサワ 「しかし話せなかったのには事情があるはず。ナカゴミ君。あまりお母、お父様を責めてはいけませんよ」

無心 「さっきから何の話をしているんだ…」

黒月天 「ワシも良く分からん」

コクブン 「…あれ？でも仙骨を持つてる親が本当の親じゃないということとは、ナカゴミはこれから先も仙骨が目覚める可能性はないんじゃない？」

間

ナカゴミ 「NO——！！」

赤英 「因みにあなたの本当の親は普通の人間よ。仙骨は全くないわ」

フルサワ 「念を押さないであげてください」

赤英 「…気になるようね？（コクブン達に）」

コクブン 「え？」

赤英 「なぜ私が忠司を育てることになったのか…気になるようね？」

コクブン、フルサワの2人微妙な感じを出す。

フルサワ「正直…そのお話は別に、」

赤英「ならば教えてあげましょう！」

フルサワ「聞きましょう！皆さん！せっかくですし！」

赤英「私達の…愛の物語を」

回想の効果音が入る。しかしその効果音の途中で無心、巨大ふ菓子を持って赤英にケツバットをする。(→の途中から無心、ふ菓子を持って素振りなどしている)

赤英「痛い！」

赤英、めちやくちやに赤英を叩き、カツラとエプロンをとって裏に投げ捨てる。

黒月天「余計な話をしておるから…」

赤英「痛い！痛いわ！ボケ！」

無心「ふふふ…仙人の弱点がお尻というのは我々と同じようだったな。しかしこれで母親感がなくなり、力が元に戻ったな！」

赤英「く…！母親。パワーが…！」

無心「はあっ！」

無心、赤英に気功術を放つ。裏に吹っ飛ぶ赤英。

ナカゴミ「かあちゃ、とおちゃーん!!」

ナカゴミも赤英を追い裏へはける。

無心「これで3人全員倒した…！」

黒月天「ふむう」

無心「どうする？残り全員でまとめてかかってくるか？」

黒月天「全員？ふふふ…冗談じゃろ？お前のような小僧、こいつらだけでなんとかするわい」

コクブン「うん！だと思ったー！」

黒月天「ほほう？段々お主も黒月天のことを分かってきたのう？」

フルサワ「やはり…ここは全員で頭を下げませんか？」

ナカゴミ(声)「下げないよ」

ナカゴミ、カツラを付けて出てくる。

コクブン「ナカゴミ…」

ナカゴミ「こいつは母の仇。お前達がやらなくても…俺1人でもやるよ」

コクブン「…あのねえ、誰も戦わないなんて言っていないでしょ！私ね、思い出したの。無心君のこと。確かにあの子は私の精神世界の人だった。でもね、それでも大切な人だったって言えるの。あいつはそんな無心君の姿を勝手に使って私達を騙した…絶対に許さないよ！」

フルサワ「あなた達は本当に損得を考えずに動きますね。しかし、私もそんな損得で働くサラリーマンが嫌で仙人になったのです。ですから私もその決別として、この損しない戦いに参加させて頂きますよ」

コク・ナカ「おっちゃん…」

黒月天「皆さん、決意は固まったようですね」

コク・フル・ナカ「うん」（ええ）（はい）」

黒月天「大丈夫。私も絶対助けに入ります。皆さんがやられたら」

ナカゴミ「うむ。できればやられる前に頼みます」

無心「だったらジジイ…お前もすぐ戦う羽目に、なるぞ！」

無心と3人の戦いが始まる。3人、同時に無心に気功術を放つが全員吹き飛ばされる。コクブンは上手、ナカゴミは下手、フルサワは真ん中からはける。無心も下手からはける。黒月天も上手からはける。上手からナカゴミ、下手から無心が出てくる。

ナカゴミ「例え仙術が使えなくとも、少しは体を鍛えてきたのだ！」

ナカゴミ、体術を繰り出すのが全て避けられ無心に片手で首根っこを掴まれる。そのまま黒子2人に手伝ってもらい、持ち上げられ、黒子2人に上手はけ口へ雑に投げられる。下手からフルサワが出てくる。

フルサワ「ならば内側からならどうです？サラリーマン仙術！ゴマ・すり！」

フルサワ、無心にゴマをする。メタ的なことも含まれる。しかし逆に無心にゴマをすられてしまい、丸め込まれてしまう。上手からコクブンが出てくる。

フルサワ「（コクブンに）こいつ（無心）けっこう良い奴ですねえ」

コクブン「馬鹿！」

コクブン、フルサワを裏まで蹴ってはけさせる。

コクブン「私が一番真面目に修行してきたんだから！はあああ…はあ！」

コクブン、両手からエネルギー弾を繰り出す（エネルギー弾。パネルを持った黒子が無心に向かっていく）。しかし無心、片手をコクブンにかざすとバックマンみたいな大きなパネルを持った黒子が現れ、コクブンのエネルギー弾を食べてしまう。コクブン、そのままバックマンパネルに追いかけれ、はけさせられる。

最後はフルサワ、コクブン、ナカゴミという順番で綺麗に無心へと向かっていくがテンポよく順番にやられる。

黒月天「まあ…そうなりますよね」

無心「さあ、これで終わったぞ？爺！」

黒月天「結局、全員やられてしまいましたか…」

無心「ああ？」

黒月天「私がない間にどれくらい成長したのか様子を見ておりましたが…やはりまだまだのようですね、私の弟子達は」

無心「何を言っている…？」

ナカゴミ「その、口調…」

フルサワ「その雰囲気…」

コクブン「まさか…」

黒月天「そろそろ、潮時のようですね」

コク・フル・ナカ「五色先生…」

黒月（五色）「そうです皆さん！私は山戸五色！変化の術で黒月天様に化けていたのです！」

無心「何…変化の術だ…」

黒月天（五色）「さて、それでは変化の術を解きましょうか！喝！！」

暗転。

間

明転。

『タタン！』という軽快な音。舞台に五色が現れる。しかし黒月天ははけていない。

五色「なんでまだ出てるんですか！はけてください！」

黒月天 「え？いやだってワシちょうど今ここに助けに着いただけなんじゃけど…？」

五色 「ややこしい！じゃあもう裏で見ていてください！」

黒月天 「えー？なんで怒られてんのワシ？」

黒月天、とぼとぼとはける。

無心 「お前が山戸五色か…！」

コクブン 「五色先生、よくご無事で…！」

フルサワ 「しかしなぜ今まで姿をお見せくださらなかったのですか？」

ナレーション 『五色は語った。五色が10年前、白仁季を倒した直後、エイリアン達が宝玉を狙っている気配に気づいたことを。そして3人の弟子と宝玉を守るため、蓬莱山にかかる迷いの術を強め、力のある者を外から入れなくしたことを。そして今度はその術のせいで、五色自身が蓬莱山に帰ることができなくなってしまったことを』
※→このナレーション中、五色と無心はマイムをする。

コク・フル・ナカ 「えー…！」

ナカゴミ 「けっこうクソみたいな理由だったぞ」

五色 「まあ悩んでも仕方ないので、術が薄れるまで私は私で修行をしていたという訳です」

無心 「まぬけな話を長々と…しかし、一番偉い仙人の仙骨数値が12万2だとはおかし
いと思っていたんだ。お前、あの赤英という仙人と同じ程度なら僕には勝てないぞ？」

五色 「そうですね。なのでここはやはり、もう一度私の弟子達にも戦ってもらいましょ
うか」

コク・フル・ナカ・無 「え？」

五色 「宝玉を使いパワーアップした、ね」

無心 「宝玉だと…！やはりここにあったのか…！」

五色 「さあ皆さん！よくぞこれまで守り通してくれました！今こそ！黒月天様の宝玉
を！使うのです！」

ナカゴミ 「まったく五色先生…！」

フルサワ 「ここまで守るの、苦労したんですよ？」

コクブン 「ということでは先生…！」

コク・フル・ナカ 「宝玉ってどこにあるんですか？」

五色 「あ、やつぱり分からないんですね。皆さん、あの時です。10年前修行で入った
自分の精神世界。あなた達はあそこで、黒月天様から授けてもらった物があるは

ずですよ！」

ナカゴミ「…缶コーヒー！（懐から取り出す）」

フルサワ「名刺入れ！（懐から取り出す）」

コクブン「ブレスケア！（懐から取り出す）」

五色「それは3つに別れた宝玉の欠片です。そしてその宝玉には、持った者が修行をすればするほど力が込められるのです！皆さん、しっかり修行はしていましたね？」

フル・ナカ「はい！」

コクブン「お前ら…」

五色「さあ、その中から宝玉を取り出すのです！」

3人、それぞれが持っている物からガムを取り出す。

ナカゴミ「あの、これなんか『すっぱいレモンにご用心』のやつっぱいんだけど！」

五色「違います！宝玉です！それを口に含むのです！」

3人、恐る恐るガムを口に入れる。どれがアタリ（ハズレ）かは完全にランダム。アタリだった人はリアクションをとる。

五色「これ誰に当たるかは回によってランダムですの」

アタリじゃない人1「力が…！」

アタリじゃない人2「湧いてきた…！」

無心「く…！（スカウターを付けてコクブンとフルサワを見る）こいつらの強さが！格段に上昇している！（ナカゴミを見る）…ごめん」

ナカゴミ「なぜ謝った？おいなぜだ？」

無心「いやでも数値、2倍だったよ」

コクブン「じゃあ4だね！」

五色「ナカゴミ！」

ナカゴミ「いやだってそもそも俺仙骨無いから仕方なくない？」

五色「まあとにかく…先ほどの彼らとは何もかも違っていると、思いますよ？」

五色を含め4人と無心の戦いが始まる。4人、同時に無心に襲い掛かり、そのまま無心を真ん中からはけさせる。4人も真ん中からはける。下手からフルサワ、上手から無心が出てくる。

フルサワ、無心にゴマをする。先ほどよりもゴマすりが上手い。無心、何とか反

撃しようとしたところに五色も現れ、無心にゴマをすり、無心、丸め込まれてしまふ。五色とフルサワ、はける。そこに上手からコクブンが出てくる。

コクブン、両手からエネルギー弾を繰り出す(先ほどより大きいエネルギー弾。パネルを持った黒子が無心に向かっていく)。無心、我に返り両手をコクブンにかざすとパックマンパネルを持った黒子が現れ、何とかコクブンのエネルギー弾を食べようとする。しかし五色、パックマンパネル自体を攻撃し破壊する。

最後はフルサワ、コクブン、ナカゴミという順番で綺麗に無心へと向かっていき、無心を攻撃する。しかしナカゴミだけ攻撃が利かず逆に無心にビンタされる。が、その後ろにいた五色の攻撃を受ける。倒れる無心。

ナカゴミ「どうだ。これが我々の力だ」

無心「くそ！ならば、最後の手段だ……！僕の仲間達から力をもらおう！」

五色「仲間ですって？」

無心「そうだ！空を見ろ！すでにこの地球の周りには我々の仲間が大量にいるのだ！宇宙船でな！」

2人の黒子が紙でできた宇宙船を割り箸に付けて後ろの幕の間くらいに浮かせている。

コクブン「空にたくさん宇宙船が！」

フルサワ「大量にいますねえ……！」

無心「そしてこの仙骨スカウターに……宇宙パワーを注入させるのだ！」

『ビビビビ』という効果音・照明効果と共に紙の宇宙船が小刻みに震える。天を仰いでいる無心も小刻みに震える。

無心「ふふふ……これで僕は無敵だ……！」

五色「確かなかなりの力を感じます……！」

無心「単純に僕がパワーアップしただけではない……！この装置の機能もグレードアップしたのだ！今の僕はこの場にいる全ての仙骨に反応できる。つまり仙骨が強ければ強いほどお前達の動きは手に取るようにわかるのだ！」

五色、コクブン、フルサワの3人、無心に攻撃するが全て楽々回避される。

五色 「これはやっかいですね…！」

無心 「自分達に仙人の才能、仙骨があることを恨むが良い！はっはっはっはっ！」

ナカゴミ、巨大ふ菓子を持って無心にケツバットをする。（→の途中からナカゴミ、ふ菓子を持って素振りをしている）

無心 「痛い！」

ナカゴミ、めちやくちやに無心を叩く。そして無心の持つ装置を壊す。

無心 「痛い！痛いよ！やめろ！」

フルサワ 「なるほど…彼には仙骨が無い。だからやつに気付かれず攻撃できたのですねえ」
コクブン 「弱くてありがとう！ナカゴミ！」

ナカゴミ、グッと親指を立てる。

五色 「さあ、これであなたの力も元通りです。降伏しなさい」

無心 「…まだだ！まだあそこに（紙の宇宙船を指差す）大量の仲間がいるんだ！すぐに助けにくるぞ！」

下手側の紙の宇宙船が裏返ると「す」「ぐ」「い」「く」「ぞ」となる。

五色 「確かにあの数は厄介です。しかし手はあります。宝玉の力を1つにまとめるのです！」

コク・フル・ナカ 「え？」

五色 「あなた達の力を、私に預けてください！」

3人、頷く。そして五色に手を重ね、離す。五色の手がめっちゃ震えている。

五色 「これは…もうなんかすごいです…！やばい…やばいですこれ…！」

ナカゴミ 「なんか禁断症状の人みたいだ」

五色 「今だったら…何でもできそうです！」

無心 「な、何をする気だ…？」

五色 「ふん！（幕の間に手を入れる）…はっ！」

五色のかけ声と共に手を入れた幕の上から別の手が出てきて、紙の宇宙船を

次々と握りつぶしていく。上手側の紙の宇宙船が裏返ると「く」「そ」「に」「げ」「ろ」となる。

無心 「くそー！なんというデタラメな力なんだー！」

ナカゴミ 「今度こそ」

フルサワ 「完全勝利、ですねえ」

コクブン 「やったー！」

無心 「くっ…このまま我々をどうする気だ…？殺すのか…？それとも強制労働か…？」

五色 「そうですね。それでは…私の弟子に、なって頂きましょうか」

無心 「は？何を言っている？僕達はこの星を侵略しようとしたんだぞ！」

五色 「そうです。しかし、あなた達同様この地球を狙う侵略者はまだまだいるでしょう。だからどうでしょう？あなた達の優秀な力を、私の元で使ってはくれませんか？」

無心 「しかし…」

五色 「地球の仙人は現在人手不足。なのでまだまだ仙人募集中、ですよ？黒月天様」

黒月天、出てくる。

黒月天 「うむ」

無心 「だったら…応募しようかな」

フルサワ 「一気に弟子を増やしますとは」

コクブン 「やっぱり五色先生はすごい！」

ナカゴミ 「うむ。私の誇り高い先生であるな」

白仁季、赤英、青虎が台詞を言いながら1人1人出てくる。

白仁季 「まったく…最後まで山戸五色には敵わないな」

赤英 「彼はもう我々3大仙人を越えているね」

青虎 「もしかすると黒月天様よりも、な」

黒月天、肩をすくめる。りんず、慌てて出てくる。

りんず 「皆さん大変です！遠方より別の宇宙人、かなりヤバい星人というエイリアンがやってきました！」

コク・フル・ナカ・赤・青・白 「何？」

無心 「かなりヤバい星人だって…奴等は僕達の星を滅ぼしたにつつきエイリアン！」

出してきました。確かに私も試験で精神世界に入っていましたね、はい」

青虎「まあしかし、これでお前も仙人だ。お前のような若い弟子が仙人になれることは珍しい！師匠である私も鼻が高い！私の仙人としての箔もさらについたというものだ！はっはっはっはっは！」

『ピンポーン』という効果音。

青虎「おや？」

白仁季、拍手しながら下手から出てくる。OPBGが流れ始める。五色同様、赤英もオロオロし出す。

白仁季「よくやった青虎よ。合格だ」

青虎「おやおやおや？」

白仁季「ふっふっふ。まだ、頭が現実世界に戻れていないようだな。まあしかし、これでお前も仙人だ。お前のような若い弟子が仙人になれることは珍しい。師匠である私も鼻も高いというものだ！」

『ブッブー』という効果音。

白仁季「ブッブー！」

『うそうそピンポーン』という効果音。

白仁季「なんだそれ！というか私もかーい！」

コクブンは上手、フルサワは下手、ナカゴミは真ん中から拍手をしながら出てくる。青虎もオロオロ仲間に加わる。

コク・フル・ナカ「よくやった白仁季よ。合格だ」

白仁季「あれ？あなた達が、私の師匠…？」

フルサワ「その通りだ。何を言っている？」

コクブン「まだ頭がこつちに戻ってきていないのね」

ナカゴミ「我々こそがお前の師匠、3大仙人だ」

コク・フル・ナカ「はっはっはっは！」

『ピンポーン』という効果音。

ナカゴミ 「はい！くると思ったー！」

オロオロしていた五色、急にきりつとなり、拍手をし出す。

五色 「よくやったお前達、合格だ」

ナカゴミ 「お前かい！」

五色 「そう！結局私が一番偉いのだ！」

そのままそんなやり取りを続ける舞台上の人物達。

そんな中、幕がゆっくり開いていくと後ろに髭をいじっている黒月天がいる。またスクリーンにも黒月天が大きく映っている（舞台の黒月天と同じ動きをしている）。

黒月天 「仙人の修行は果てしなく続くのじゃあ！あっはっはっはっはっは…」

『ピンポーン』という効果音。

黒月天 「え？ワシも？（後ろを振り向く）」

徐々に暗転していく。

(終)